長崎県文化財調査報告書　第１７６集

地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅰ

２００４

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第１７６集

地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅰ

・百花台遺跡群（国見町）
・大野原遺跡　（有明町）
・畑中遺跡　　（島原市）

２００４

長崎県教育委員会

発刊にあたって

本書は平成１４年度から開始された重要遺跡情報保存活用事業に伴う地域拠点遺跡内容確認発掘調査の報告書です。

現在長崎県内には約3,800ヵ所の遺跡が知られております。そのうち歴史上・学術上価値が高く，わが県の歴史・文化を理解するうえで欠くことのできない遺跡であり，地域の歴史的遺産として保存・活用すべき遺跡を155ヵ所選定し，特に重要遺跡として位置づけております。

本事業は，重要遺跡の基礎データを収集するためのもので，遺跡の広がりや遺構の有無などの内容の確認を行い，開発事業に係る調整に円滑な対応をすることが可能となり，文化財保護行政の推進に寄与するものであります。

重要遺跡の発掘調査は，平成３年に始まりこれまで２９遺跡で実施してきました。今年度報告する遺跡は，いずれも島原半島に所在する地域を代表する拠点遺跡である国見町百花台遺跡，有明町の大野原遺跡，島原市の畑中遺跡の３ヵ所です。

百花台遺跡は日本を代表する旧石器時代の大遺跡として知られ，大野原遺跡は縄文時代から古代，畑中遺跡は縄文時代から中世にかけての拠点的遺跡であります。

最後に調査に御協力いただきました関係者の皆様にお礼を申し上げるとともに，今回の調査成果が，埋蔵文化財の保護と開発事業との調整のための基礎資料として活用され，文化財の愛護に役立つことを念じて発刊のあいさつとします。

平成１６年3月３１日

長崎県教育委員会教育長
木村　道夫

例　　言

1　本書は長崎県教育委員会が平成１４年度から実施している地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書である。

2　本書には平成１４年度に調査した百花台遺跡群（国見町），大野原遺跡（有明町），畑中遺跡（島原市）の調査結果を収録した。

3　本書では，各遺跡の結果報告を分担執筆した。それぞれの執筆者は以下のとおりである。

百花台遺跡群	川道　寛
大野原遺跡	古門　雅高
畑中遺跡	古門　雅高

4　本書の総括編集は川道が行った。

総　目　次

第Ⅰ部　百花台遺跡群　南高来郡国見町所在
　第１章　位置と環境
　第２章　調査
　第３章　まとめ

第Ⅱ部　大野原遺跡　南高来郡有明町所在
　第１章　遺跡の立地と環境および調査履歴
　第２章　調査

第Ⅲ部　畑中遺跡　島原市所在
　第１章　遺跡の立地と環境及び調査履歴
　第２章　調査

第Ⅰ部　百花台遺跡群

例　　言

1．本書は南高来郡国見町に所在する百花台遺跡群の発掘調査報告書である。
2．調査は長崎県教育庁学芸文化課が主体となり，国見町教育委員会の協力を得て，平成15年１月20日から２月４日にかけて実施した。
3．調査関係者は次のとおりである。

調査担当	長崎県教育庁学芸文化課	主任文化財保護主事	川道　寛
		文化財調査員	井立　尚
		〃	樋口健太郎
調査協力	国見町教育委員会	辻田直人氏，竹中哲朗氏	

4．発掘の許可をこころよく許可していただいた地主の林富男，渡辺武義，塚根眞由美氏に感謝いたします。
5．土層の実測・トレースは井立，樋口が行った。
6．遺物の実測は中村ヒロ子が行い，川道がトレースした。図面作成は浜崎美加，和田美加，横田愛子の援助を得た。
7．遺物の写真撮影は，富永諭美・成田万里の補助を得て，竹田ゆかり・川道が行った。
8．本書における遺物・写真・図面は長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室に保管している。
9．本書の執筆・編集は川道が行った。

本　文　目　次

第１章　位置と環境……1
　第１節　地形と地質……1
　第２節　歴史的環境……3
第２章　調査……4
　第１節　調査の経過……4
　第２節　層位……5
　第３節　遺物分布……8
　第４節　遺物……11
第３章　まとめ……20
　第１節　百花台遺跡群の細石器文化研究史……20
　第２節　百花台遺跡群の細石器石器群……21

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　試掘坑配置図……5
第３図　層位図……6
第４図　遺物分布図……9
第５図　遺物接合図（１）……10
第６図　遺物接合図（２）……11
第７図　遺物実測図（１）……13
第８図　遺物実測図（２）……14
第９図　遺物実測図（３）……15
第10図　遺物実測図（４）……16
第11図　遺物実測図（５）……17
第12図　遺物実測図（６）……18
第13図　小ヶ倉Ａ・Ｂ遺跡の土層対比……21
第14図　小ヶ倉Ａ遺跡出土遺物……22

表　目　次

第１表　小ヶ倉Ｂ遺跡出土遺物計測表……19

図　版　目　次

図版１　調査風景……28
図版２　TP-3 北壁土層断面……28
図版３　TP-4 遺物出土状態……28
図版４　TP-4 遺物出土状態……28
図版５　TP-4 北壁土層断面……28
図版６　TP-7 東壁土層断面……28
図版７　細石刃１（表）……29
図版８　細石刃１（裏）……29
図版９　細石刃２（表）……30
図版10　細石刃２（裏）……30
図版11　細石核・打面再生剥片（上段：表、下段：裏）……31～34
図版12　剥片……32
図版13　剥片類・砕片……33
図版14　剥片・砕片……34

第１章　位置と環境

第１節　地形と地質

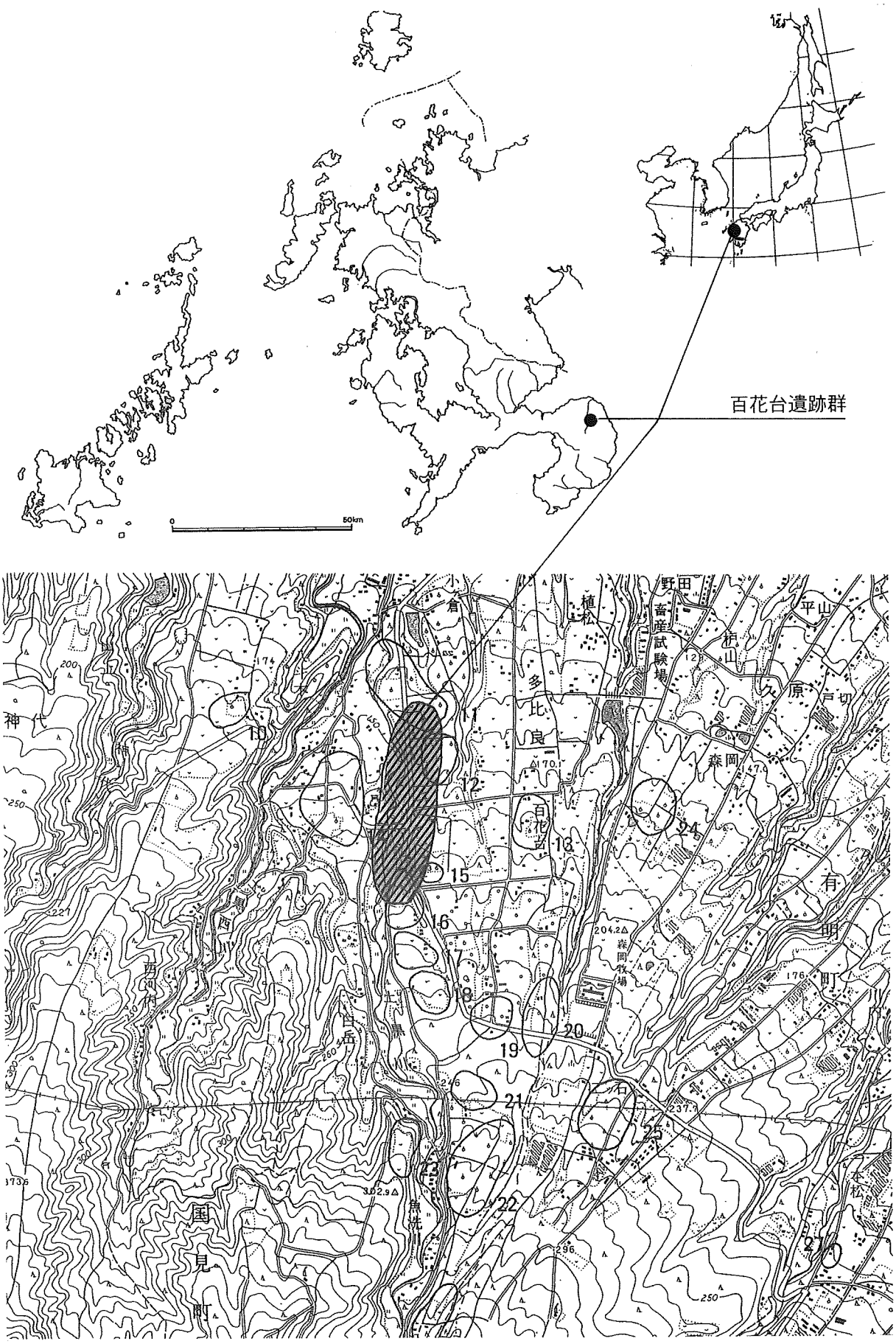
島原半島の中央部にある雲仙火山群には，普賢岳を主峰に，国見岳・妙見岳や九千部岳など，1,000m級の溶岩円頂丘（トロイデ）群がそびえている。雲仙火山は，約25万年前に活動を開始し，度重なる噴火によって大成層火山を形成した。その基盤層は安山岩類の砂礫からなるが模式地から竜石層とよばれ，百花台遺跡群の所在する火山性山麓扇状地の基底をなしている。

百花台遺跡群には分厚い火山灰が堆積している。広域テフラと雲仙火山に起源をもつローカルテフラおよび火砕流堆積物との関係がよくわかる。約90,000年前の阿蘇４火砕流堆積物（Aso4）と24,000年前の姶良Tn火山灰（ＡＴ）とおよび6,800年前の鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の広域テフラを軸として，それらの間に下位から一本松火砕流堆積物や礫石原火砕流堆積物などが雲仙起源火山灰を挟在して存在する。こうした雲仙火山のローカルテフラの研究は，長崎大学の長岡信二によって精力的な研究がなされており，その成果の一部は公表されている（長岡・田島1998）が，研究の全容が発表されることを期待したい。

その他国見町教育委員会が石原・矢房遺跡，十園遺跡などの自然科学分析を行っており，年代測定とともに火山灰の同定やテフラの分析なども積極的になされており成果を収めつつある。小ヶ倉Ｂ遺跡細石器石器群の包含層である㚢層（いわゆる樫の実層）の礫石原火砕流堆積物のＣ14年代に関して19,000年前と13,000or14,000年前という２つの年代が提出されている。

さて普賢岳は有史以降も活動し，1657（明暦３）年の「古焼」，「島原大変・肥後迷惑」と称される未曾有の火山災害を招いた1792（寛政４）年の「新焼」の溶岩流はつとに知られている。1990（平成２）年11月17日，198年ぶりに噴火した雲仙岳は地獄跡火口に溶岩ドームを形成した。粘性の高い溶岩からなるドームは火口を埋め尽くしさらに成長を続け，その一部が崩落して火砕流を引き起こした。翌91年６月３日に発生した大規模火砕流では43名が亡くなるという大惨事となった。数年にわたって活動を続けた雲仙普賢岳は1996年６月３日に終息宣言がだされた。発生した火砕流は9432回に及び，噴出した溶岩の総量は23,000万㎥と発表されている。溶岩ドームは，標高1,486mに達し「平成新山」と名付けられた。2003年には，噴火活動の生成が目撃された火山活動の証としてきわめて重要であるとして国の文化審議会から天然記念物として答申された。

久原巻二は，百花台遺跡群付近の地形の変化をヴィヴィッドに再現する（久原1988）。それによれば土黒川は「舞岳と鳥甲山との鞍部から流れ下る水が次第に流路を定めて，浅く幅広い河道をつくっていたころの氾濫原が，遺跡西半部や八斗木の中位面とされる緩斜面であろう。その後土黒川は下刻作用を強めゆるく蛇行しながら，自らが作った氾濫原を掘り下げて新しい河床をつくった。これが検出された河谷につづくものであろう。このころは山麓面と旧土黒川河床との比高は，数mしかなく現在の20m近い急崖と比べれば，かなり高い所を流れていたことになる。」という。つまり遺跡群ののる山麓面は土黒川の浸食作用の影響を受ける状況下にあり，小ヶ倉Ｂ遺跡のような百花台Ⅳ層つまり礫石原火砕流の再堆積と思われるような堆積のあり方や遺物が原位置を遊離している状況などを物語るものといえよう。逆説的にいうと百花台遺跡群が土黒川よりの山麓扇状地西半部に積極的な回帰現象を繰り返すことは取りも直さず「水辺」の活用に他ならず，県北地方で湿地帯の周辺に大遺跡が形成されていることとほぼ同義の現象と思われる。


百花台遺跡群
0
50km
野田
植松
畜産試験場
平山
栃山
久原
戸切
森岡
神代
多比良
百花台
有明町
西岡
白岳
土黒
石
本松
国見町
魚洗
森岡牧場
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25

第１図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

九州地方の層位的な旧石器研究の先鞭となった百花台遺跡群の調査は，1959年古田正隆が百花台で採集した資料を持って，当時資源科学研究所にいた和島誠一を訪ねたことを契機としている。1963年和島誠一・麻生優によって，「朝鮮半島と九州との間の陸橋が最後に切れたのはいつの頃か」というテーマで発掘が行われた。麻生優によって２次調査の結果，４枚の文化層の検出に成功した。上位から第Ⅱ層に縄文時代早期の（百花台Ⅰ文化層），第Ⅲ層に細石器を主体とした石器群（百花台Ⅱ文化層），第Ⅳ層に台形石器を主体とした石器群（百花台Ⅲ文化層）が検出された。そして第Ⅵ層では，ナイフ形石器を主体とした石器群（百花台Ⅳ文化層）が検出された。とくに百花台Ⅲ文化層の台形石器は「百花台型台形石器」と呼称されている。百花台遺跡は九州地方を代表する旧石器遺跡の地位を占めることになったものの，広域テフラによる編年作業が進行する中で次第に等閑視されるに至った。

百花台遺跡が再び脚光を浴びるのは，1980年代に入ってからである。この時期，２つの事業が並行して行われた。一つは長崎県教育委員会による百花台広域公園建設に係る調査と県道国見・雲仙線改良工事に伴う緊急調査であり，あと一つは同志社大学考古学研究室・長崎県立国見高校社研部からなる百花台遺跡調査団による百花台遺跡・百花台東遺跡の発掘調査である。

前者の調査は，百花台広域公園計画に伴う分布調査が1980年に実施され，５ヵ所の遺跡を確認した。それをうけて1982・83年の２年にわたって行われた範囲確認調査をうけて，1983～85年まで３年間百花台Ｄ遺跡の緊急調査が実施され3600㎡弱が調査された。88年～96年にかけて県道国見・雲仙線関係の調査で百花台Ｂ遺跡・百花台Ｃ遺跡・百花台Ｄ遺跡および魚洗川Ａ遺跡・魚洗川Ｄ遺跡・魚洗川Ｅ遺跡の調査が，また1988年には全国植樹祭関係の魚洗川Ｂ遺跡の調査が実施され，　層～Ⅲ層にかけての各時期の石器群が礫群などの遺構とともに数多く検出された。

百花台遺跡調査団が実施した百花台遺跡の調査は1982・83年の２年間で，その後84・86・87年には百花台遺跡の東南約300mの高位段丘に所在する百花台東遺跡に焦点を絞った調査を実施した。その成果は概報・速報という形で公表され，94年には発掘記録とその分析およびテフラなどの学際的研究を網羅した報告書が刊行された。百花台東遺跡では　層を主たる包含層とする剥片尖頭器・ナイフ形石器などからなる百花台東Ⅰ文化層を検出した。

近年国見町教育委員会による圃場整備関係を中心とする調査によって，旧石器時代の石器群の検出が相次いでいる。詳細は報告書に譲るが，いくつかの遺跡について触れてみたい。

松尾遺跡はグリーンロードの北，標高60mほどである。ここでは３時期の石器群が縄文時代早期の遺物と混在する形で検出されている。周縁調整石器（これまで「斜軸尖頭器」といわれてきた石器）を２点型式学的に識別している。この資料については今後の類例の増加を待ちたい。後期旧石器時代初頭石器群は，基部に粗い調整加工を施す粗形のナイフ形石器や台形様石器や局部磨製石斧をもつまとまりのある石器群で辻田も指摘するとおり今後島原半島で層位的に出土することが期待される石器群である。ナイフ形石器石器群は，国府型ナイフ形石器・狸谷型ナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器などからなり，萩原編年の中期後半に位置づけられる。

石原遺跡は松尾遺跡と至近距離にある遺跡で，後期旧石器時代初頭の石器とナイフ形石器石器群が検出されている。前者の石器は，求心的な剥離を行う玄武岩製の円盤形石核，ワラジ形の局部磨製石斧，台形様石器の３点で，いずれも型式学的に抽出したものである。ナイフ形石器石器群は，土黒川に

よって形成された自然堤防上に営まれた石器群で，いくつかのブロックが認められる。ナイフ形石器３点，台形石器３点，ブランティングチップなどからなる。

卯才町遺跡は海岸線近くの標高８ｍの低位段丘上の遺跡で，厚い沖積層の下位にあるＡＴ直上から原の辻型台形石器の良好な石器群が検出された。

弥生時代から古代にかけての遺跡として著名になった十園遺跡からも，ＡＴ直上に原の辻型台形石器の一群，その上位に百花台型台形石器の一群という２時期の石器群が層位的に検出されている。

第２章　調査

第１節　調査の方法と内容

百花台遺跡群のある百花台地区は，戦後の開拓で開かれた土地であり，豊かな土壌に恵まれて農業が盛んである。通年耕作が行われており，発掘地点の選定には苦労したものの，百花台遺跡群の北方約１kmにいくつかの調査地点を確保できた。

第１～４試掘坑　この４ヵ所のグリッドはいずれも小ヶ倉Ａ遺跡の範囲内に設定した。西側を北流する土黒川からはある程度離れた火山性山麓斜面の尾根筋にあたる部分である。いずれのグリッドも後世の農作業に伴う土地の改変でⅣ層の礫石原火砕流（いわゆる樫の実層）の上位は除去され客土されている。そのためⅢ層までの文化層は存在せず，しかもⅣ層からⅧ層まで掘り進めたがいずれの層位・試掘坑からも遺物・遺構は検出できなかった。

第５・６試掘坑　小ヶ倉Ｂ遺跡の西方に設定した試掘坑である。第５試掘坑は攪乱がひどく，遺物の出土は確認できなかった。第６試掘坑は，地主が採石の置き場としてⅣ層上面まで掘削しており，調査はⅣ層以下に絞られたもののⅣｃ層から後期旧石器段階の扁平な茶園型細石核をもつ細石器石器群の検出に成功した。

第７試掘坑　今回の調査でもっとも標高の高い地点に設定した試掘坑である。百花台Ｂ遺跡の範囲内にあるものの，時間的な制約のためにⅢ層以下の発掘を断念したため包含層の有無を確認できなかった。Ⅱ・Ⅲ層からは遺物の出土はなかった。

地域拠点遺跡範囲確認調査結果

百花台遺跡群は，百花台Ａ～Ｆ遺跡，魚洗川Ａ～Ｃ遺跡からなる遺跡群とされてきた。ところでこれらの遺跡群は，基本的には百花台の火山性山麓扇状地の西側斜面の土黒川東岸を選択的に占拠しており，遺跡群を分断する地形的な特徴は認められない。これらの一連の遺跡群については境界線を引く必要はないものと思われる。確かに遺物・遺構のあり方には多寡があることは疑う余地はないが，空白地域も一定の遺跡空間として理解することが肝要であろう。特に百花台遺跡群（百花台遺跡Ａ～Ｆ遺跡）は一つの大きな遺跡としてとらえ直すことができよう。

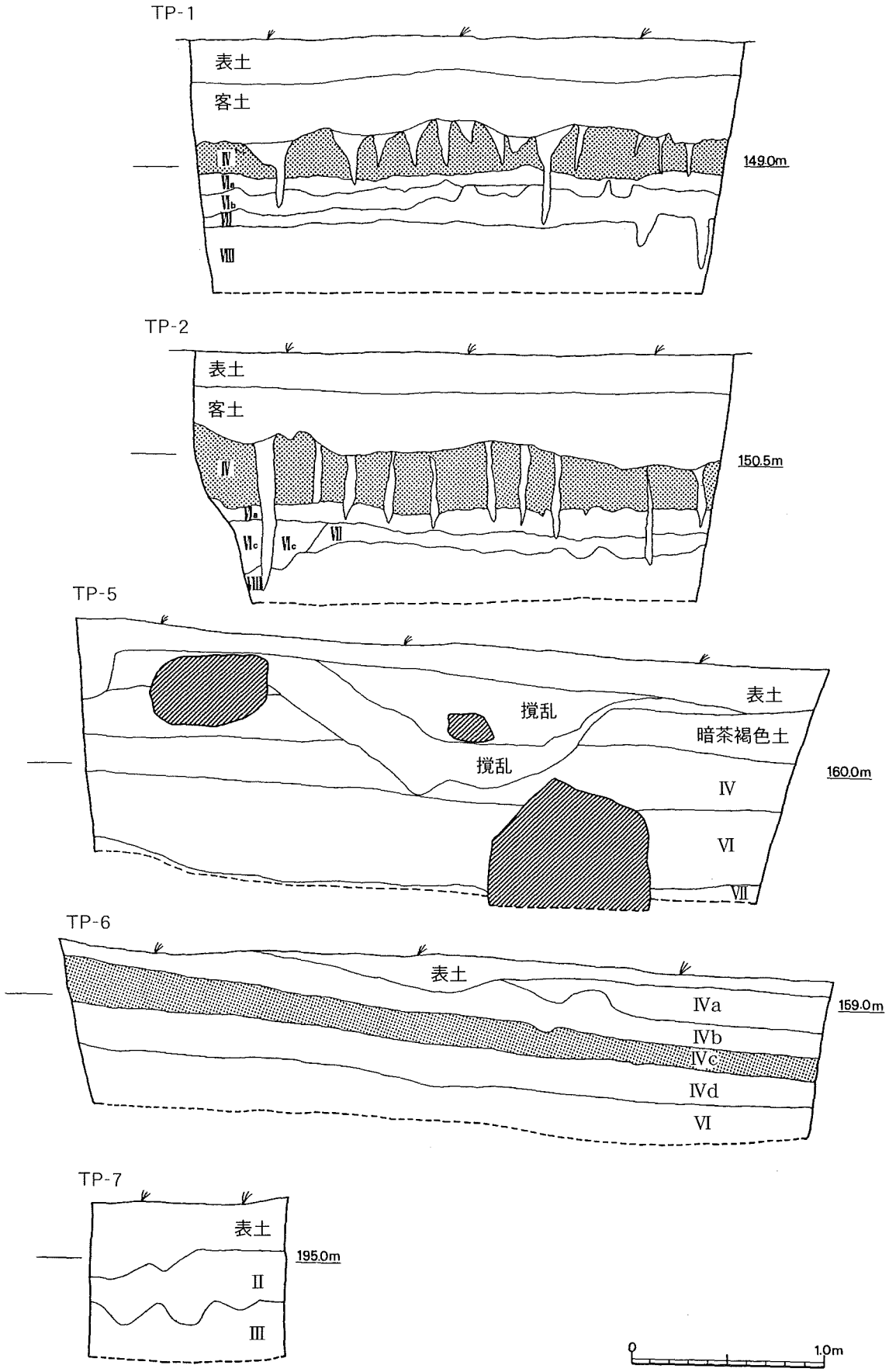
また土黒川東岸の積極的な活用が敷衍化できるとすれば，現在小ヶ倉Ａ遺跡と小ヶ倉Ｂ遺跡にわけられている両遺跡の土黒川東岸部にかけては遺跡が広がることが想定される。実際に現在の遺跡範囲外となっている畑からは縄文時代土器片や玦状耳飾なども採集されている。今回の調査結果と，遺物の採集状況などから判断して，遺跡範囲の見直しが必要となる。現在の小ヶ倉Ａ遺跡と小ヶ倉Ｂ遺跡

第２図　試掘坑配置図

を結合する形で，土黒川よりに範囲を拡大してＡ遺跡とＢ遺跡を合併させた方が実際的と思われる。

第２節　層位

今回の調査では地点を変えて数カ所で調査を実施した。百花台遺跡群においては基本的な層序ができており，地表面に近いほうから名づけて、Ⅰ層からⅧ層までの８層を数える。火山灰層であるため、


TP-1
表土
客土
IV
VIa
VIb
VII
VIII
149.0m
TP-2
表土
客土
IV
VIa
VIc
VIc
VII
VIII
150.5m
TP-5
表土
撹乱
暗茶褐色土
撹乱
IV
VI
VII
160.0m
TP-6
表土
IVa
IVb
IVc
IVd
VI
159.0m
TP-7
表土
II
III
195.0m
0
1.0m

第３図　層位図

百花台一帯で共通したものとなっている。

第１・２試掘坑の層位

尾根部に近いところに設定した試掘坑では，Ⅳ層までは削平され，客土されているために百花台遺跡群の標準土層であるⅠ層からⅢ層を欠落している。

表　土　耕作土。茶褐色を呈する土壌で，耕作のために客土したものである。

客　土　暗茶褐色を呈する土壌である。

Ⅳ　層　径５mm程度のピンク色のパミス（軽石）粒や角閃石安山岩の小礫を多量に含む，きわめて硬質の黒褐色火山灰土層で，乾裂（クラック）が顕著である。耕作が困難なほど堅く締まった土層で農家を悩ませる「樫の実層」で，正式には礫石原火砕流堆積物と呼ばれる。層厚約20～30cmを測る。

Ⅳａ層　茶褐色を呈するよく締まった火山灰土層で，パミス粒を多量に含む。層厚は約20cmである。

Ⅳｂ層　暗褐色を呈する非常に硬い火山灰層でパミスをほとんど含まない。第２試掘坑では認められない。層厚は10cm前後である。

Ⅳｃ層　暗茶褐色を呈する非常に硬質の火山灰土層で，Ⅳａ層に比べてパミスの密度は低い。この層中に姶良Tn火山灰（ＡＴ）の層準がある。第１・３試掘坑には検出されず，この地点では部分的なものと思われる。

Ⅶ層　黒褐色のフカフカした軟質火山灰土である。パミスを全く含まない。「第２黒色帯」とも呼ばれ，層厚10～20cmを測る。

Ⅷ層　黄褐色粘質土層。粘性に富んでいる。拳大から１m以上の角閃石安山岩の巨岩を含む。層厚不明。無遺物層。

第６試掘坑の層位

今回の調査で遺物の出土した唯一の試掘坑である第４試掘坑の層位は，他の試掘坑とは異なる堆積を示している。Ⅳ層の礫石原火砕流堆積物が４枚に分層できた。

表　土

Ⅳａ層　黒褐色土。層厚20cm程度の角閃石安山岩の結晶や小礫を含む土層で，白色・ピンク色の粒子を多量に含むきわめて締まりのよい土層である。無遺物層。

Ⅳｂ層　黒色土。層厚15cm程度の角閃石安山岩の小礫をわずかに含む層。

Ⅳｃ層　黒褐色土。１層と同じく角閃石安山岩の結晶や小礫を含むが，締まりは弱い。Ⅳａ層に比較すると小礫の割合が高い。層厚15cm内外で，遺物を包含する。

Ⅳｄ層　黒褐色土。Ⅳｃ層に比べて角閃石安山岩の割合は減少する。本層の上位からも遺物が出土する。20cm前後の層厚で，層の下位になるにつれ明化する。

Ⅵ層　黄褐色土。きわめて締まりのよい硬質の土層。20cm以上の層厚で，無遺物層。

第７試掘坑の層位

百花台Ｂ遺跡にある梨畑に設定した試掘坑である。

表　土

Ⅱ　層　茶褐色を呈するフワフワの火山灰土。遺物は出土しなかった。

Ⅲ　層　黒褐色を呈する軟質の火山灰土。

第３節　遺物分布と個体別資料

（１）遺物分布

第６試掘坑の遺物分布をみると，ほぼ全体を発掘したことがわかる。発掘区の南側は遺物の出土が希薄であり，北側および東側には若干広がることも予想される。見かけ上はまとまりがあるようにみえるが，東西方向に約６度の傾きで傾斜しており，遺物によっては立った状態で出土しているものもみられることから，原位置からは遊離して動いたことが推測される。しかし遺物には摩滅が認められないのでそれほど長距離に移動したとは考えられない。また遺跡東側の拡張区では，遺物は水平堆積している。

（２）個体別資料

第６試掘坑からは排土表採のものを含めて総計117点の遺物が出土している。いずれも黒曜石を素材とするもので，大半は漆黒色を呈する円礫の腰岳系黒曜石であり，青灰色の針尾・土器田系黒曜石が１個体分ある。前者は，単体資料５個体を含めて14個体に識別できる。

個体別資料Ａ　13＋28＋37＋51＋73＋81＋83＋101の８点からなる。透明度の全くないもの。自然面のあり方から判断して松浦牟田産の可能性が高い。

個体別資料Ｂ　５＋７＋12＋21＋22＋23＋29＋34＋44＋54＋95の11点からなる。薄い端部が透明になるもの。ＢからＮまでは自然面のあり方などからみて腰岳・牟田系ではあるものの針尾島原産の黒曜石と思われる。

個体別資料Ｃ　１＋２＋８＋10＋17＋19＋20＋24＋27＋30＋31＋32＋33＋35＋36＋39＋42＋45＋47+48＋49＋50＋52＋53＋70＋71＋75＋77＋80＋82＋84＋87＋88＋89＋94＋97＋99の37点からなる。透明度が高いもので，なかには縞状になるものもある。

個体別資料Ｄ　14＋15＋25＋96の４点からなる。帯状の透明部をもつもの。

個体別資料Ｅ　３＋６＋９＋11＋16＋18＋26＋41＋43＋55＋74＋76＋79＋85＋100の15点からなる。透明部が不規則な形であるもの。

個体別資料Ｆ　46＋58＋65＋67＋72＋78＋86＋91＋93＋98の10点からなる。不透明なもの。

個体別資料Ｇ　60＋63＋64の３点からなる。不透明なものだが自然面のあり方が異なる。

個体別資料Ｈ　40＋68＋69の３点からなる。白い斑紋が顕著にみられ，剥離面がざらついた感じがするもの。

個体別資料Ｉ　66＋90の２点からなる。素材となる円礫が小型のもの。

個体別資料Ｊ　56。単体資料。漆黒色の不透明なもの。

個体別資料Ｋ　57。単体資料。漆黒色だが自然面のあり方が異なるもの。

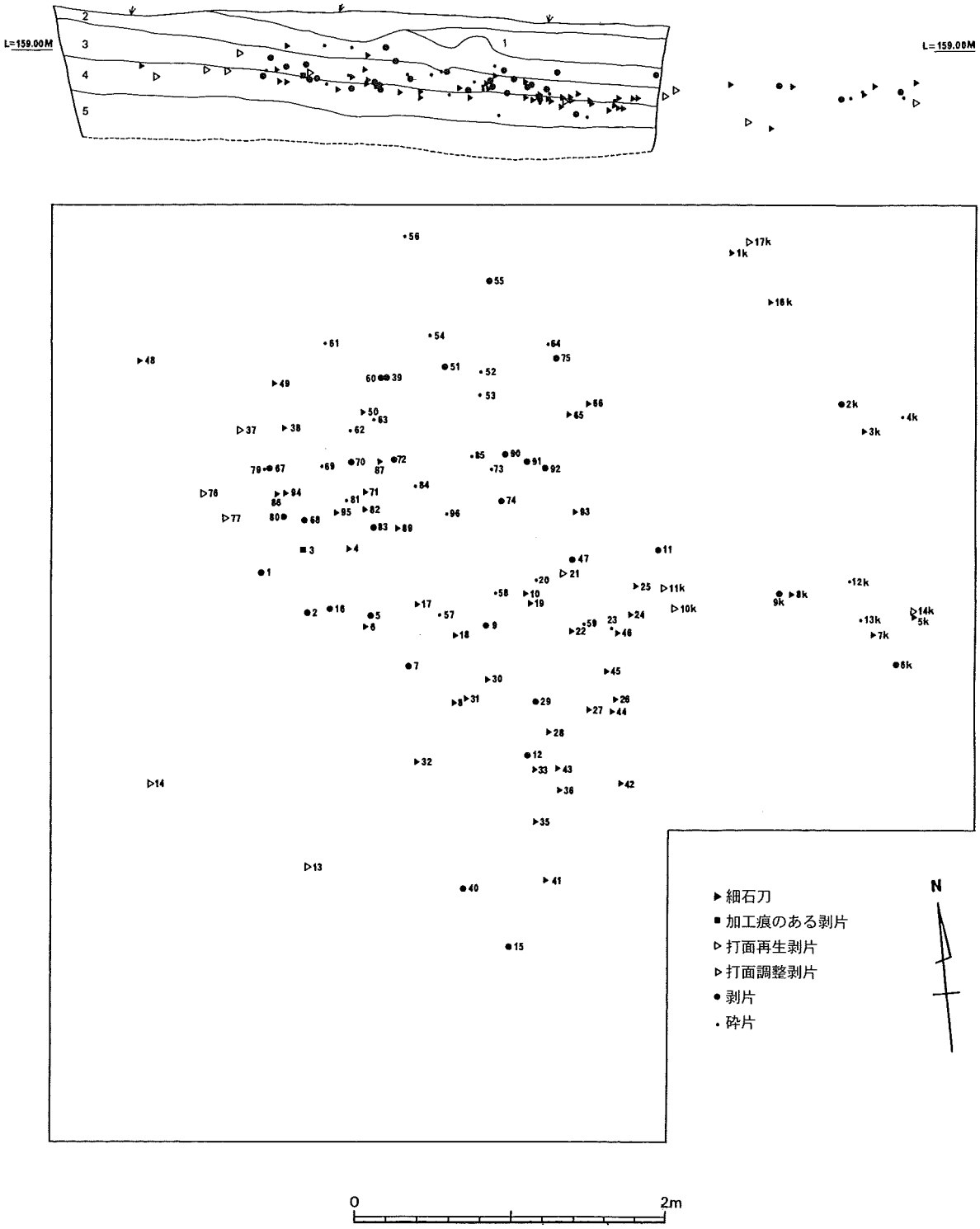
個体別資料Ｌ　59。単体資料。流理構造がみられるもの。

個体別資料Ｍ　61。単体資料。剥離面が濁った感じのもの。

個体別資料Ｎ　62。単体資料。流理構造がみられるもの。

青灰色黒曜石を素材とするものとして，第12図102～116までの15点からなるものが，１個体として認識できる。

このように小ヶ倉Ｂ遺跡では，大きく牟田および針尾島という２つの原産地から，茶園型細石核を


L=159.00M
L=159.00M
2
3
4
5
1
▶細石刀
■加工痕のある剥片
▷打面再生剥片
▷打面調整剥片
●剥片
・砕片
N
0
2m

第４図　遺物分布図

取り込む個体別資料Ａを除いて，少なくとも14個体の原石素材を原礫のまま遺跡内に持ち込んだことが推測できる。

（3）接合資料

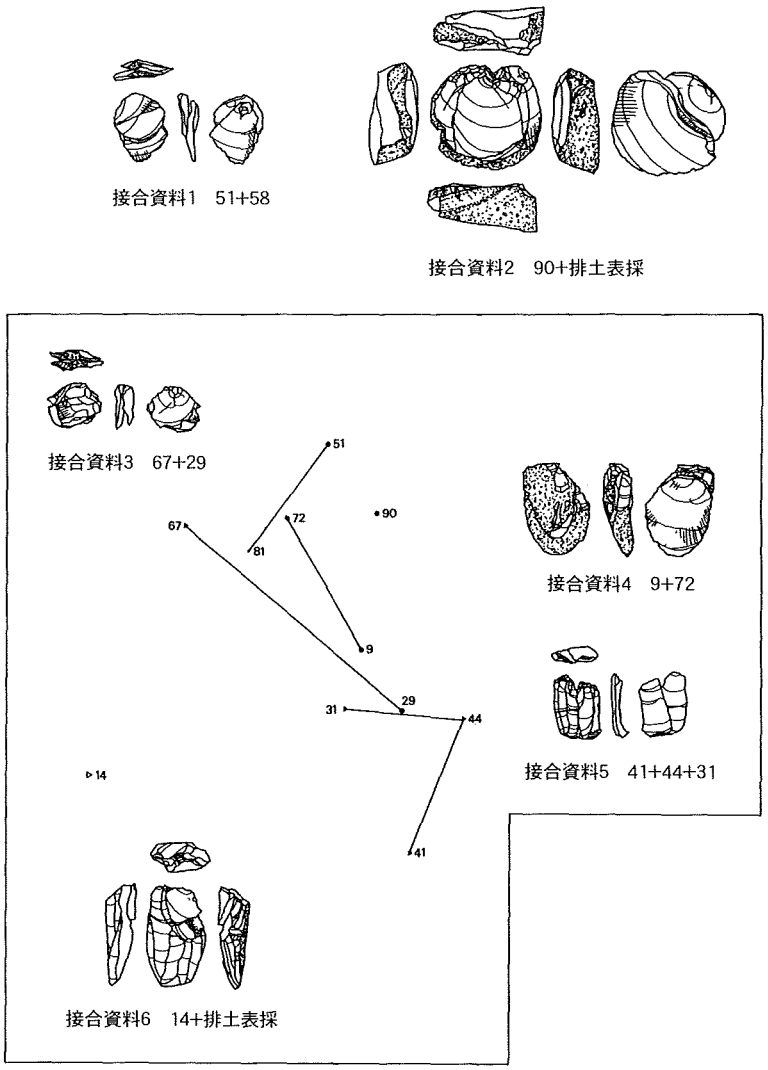
接合資料は，腰岳系黒曜石を素材とするものが６例，針尾・土器田系黒曜石を素材とするものが１例ある。煩雑になるがこの項で使用する番号は第４図の遺物分布図および第１表の遺物番号であり，図版番号ではないことをお断りしておく。

接合資料１　51＋81の２点が面接合した。透明度の高い腰岳系黒曜石を素材とする。

接合資料２　90と排土表採の２点が面で接合した。円礫を輪切りにした剥片で細石核素材獲得に伴うものであろう。

接合資料３　67＋29の２点が面で接合する。打面調整に伴うものである。

接合資料４　９＋72の２点が接合する。円礫の自然面を取り除いた際の剥片である。一部に節理面による剥離もみられる。



第５図　遺物接合図（１）

接合資料５　41＋44＋31の３点が接合する。細石刃同士の接合例で，折断面接合である41＋44と31が剥離面で接合する。

接合資料６　打面再生剥片である14と排土表採の細石核が面で接合する。茶園型細石核における打面再生のあり方をしめす好例である。

接合資料７　７＋16＋68＋80の４点が接合する。これを２分して７＋16，68＋80という２つの厚手の剥片を作り出し，さらにそれらを２分割しているが石器としては使用していない。

接合資料８　12＋54の２点が接合する。剥片と砕片の接合例である。

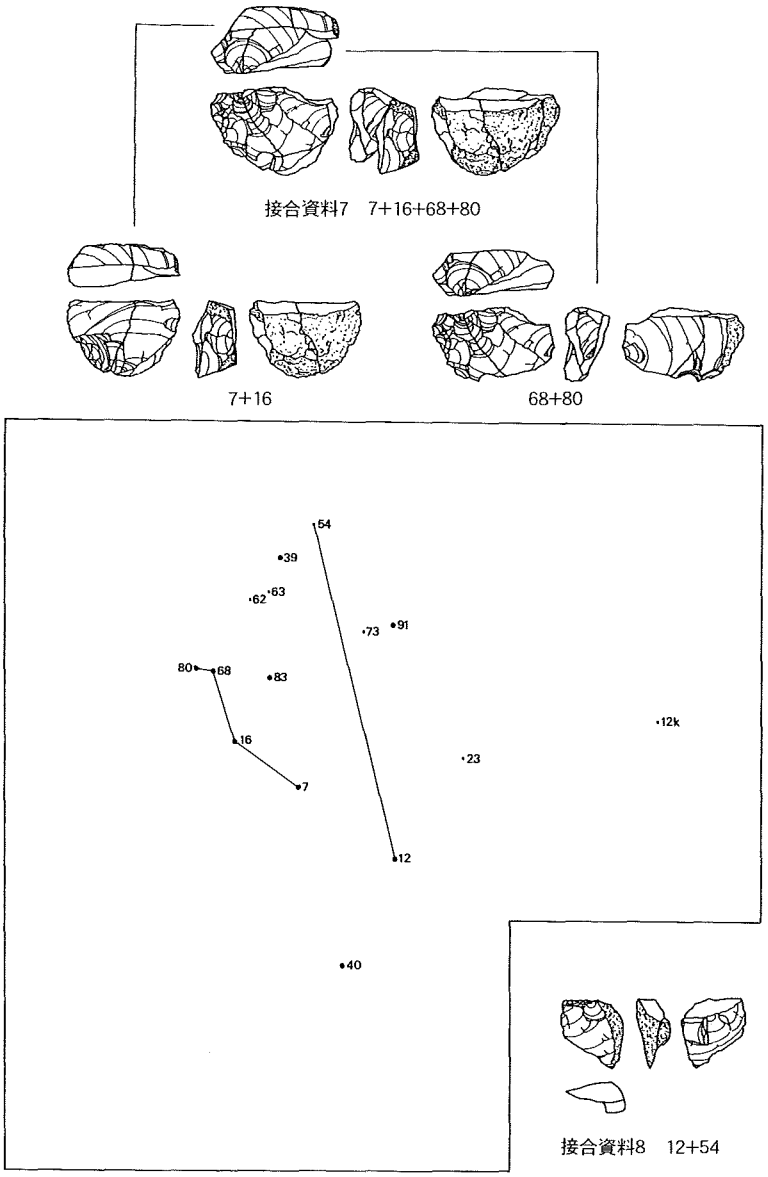
以上，接合資料１～６までが腰岳・牟田系の漆黒黒曜石を素材とするもの，７・８が青灰色の針尾・土器田系の黒曜石を素材とするものである。いずれの接合例も２～４点の接合にすぎず，剥片剥離

技術の全容が把握できる資料は得られていない。

第４節　遺物

①細石刃

今回の調査で出土した細石刃の総数は50点にのぼる。部位別では，完形３点，頭部および先端部を欠くもの20点，中間部16点，先端部および頭部を欠くもの11点となっている。総計に占める各部位の比率は完形6.0％，頭部40.0％，中間部32.0％，先端部22.0％となり，頭部の比率が大きい。使用された石材は腰岳・牟田系の漆黒色黒曜石に限定されている。



第６図　遺物接合図（２）

完形（第７図１～３）

完形は３点で，長さの範囲は27.1㎜～17.6㎜にあり，平均値は20.9㎜である。幅は9.7㎜～7.2㎜の範囲にあり，平均8.3㎜である。厚さは2.5㎜～2.1㎜の範囲にあり，平均2.2㎜である。重量は0.48ｇ～0.21ｇの範囲にあり，平均0.33ｇである。

１は透明度の高い漆黒色の黒曜石を素材とし，頭部調整は丁寧に施され打面は極端に小さい。２は透明度の高い素材を用いているが，頭部調整はみられない。３は線状打面をもつ。

頭部（第７図４～23）

頭部は20点で，自然面をもつものが11点を数える。長さの範囲は25.9㎜～9.3㎜にあり平均は16.7㎜，幅は10.9㎜～6.5㎜の範囲にあり平均8.2㎜，厚さは3.5㎜～1.5㎜の範囲にあり，平均2.2㎜である。重量は0.73ｇ～0.08ｇの範囲にあり，平均0.33ｇである。

作業面調整が入念になされた結果，打点部が丸みを帯びる頭部調整がほとんどである。側面観はほぼ直線に近くなる。稜線は１～３本であった。４～15は，先端部付近を欠くもので，長めの頭部であり，12点中自然面をもつものが９点と75％の高率である。16～23は，短めの頭部であるが，８点中自然面をもつものは２点で25％であり，長めの頭部と比較すると低率である。

中間部（第８図24～39）

中間部は全部で16点で，自然面をもつものが６点あり，38％と高い比率である。長さの範囲は19.3㎜～8.9㎜にあり，平均では12.5㎜，幅は11.0㎜～5.2㎜の範囲にあり平均7.9㎜である。厚さは2.5㎜～1.0㎜の範囲にあり平均1.9㎜である。重量は0.46ｇ～0.05ｇの範囲にあり，平均0.20ｇである。

本遺跡の中間部の形状として注目すべき点は，28・30・34・37・38・39のように刃部を欠損するものが多いということであり，さらには折断部が斜め方向になるものが顕著であるということが指摘できる。

先端部（第８図40～50）

先端は11点で，自然面をもつものが４点，36％あった。長さの範囲は23.1㎜～10.9㎜にあり，平均値は15.7㎜である。先端部の長さの頻度はばらつきが大きく斉一性がない。幅は11.5㎜～5.6㎜，平均8.5㎜である。厚さは3.8㎜～1.4㎜の範囲にあり，平均2.3㎜である。重量は0.67ｇ～0.12ｇの範囲にあり，平均0.31ｇである。

小ヶ倉Ｂ遺跡の細石刃の特徴をいくつか指摘する。まず自然面を有する細石刃の比率が非常に高いことがあげられる。素材となる原礫が小形のため，細石核において自然面の割合が高いことが推測される。２つめとして，細石刃に幅が大きいことである。隣接する小ヶ倉Ａ遺跡の縄文時代草創期のそれと比較すると，小ヶ倉Ｂ遺跡では8.4㎜，小ヶ倉Ａ遺跡TP-10で6.3㎜，TP-７ではさらに細く4.9㎜にすぎずその差は大きい。Ｂ遺跡が茶園型，野岳・休場型を主体とするのに対し，Ａ遺跡TP-10では楔形を，TP-７では百花台型というように細石核の形態の差に由来するものであることはいうまでもない。

②細石核（第９図51）

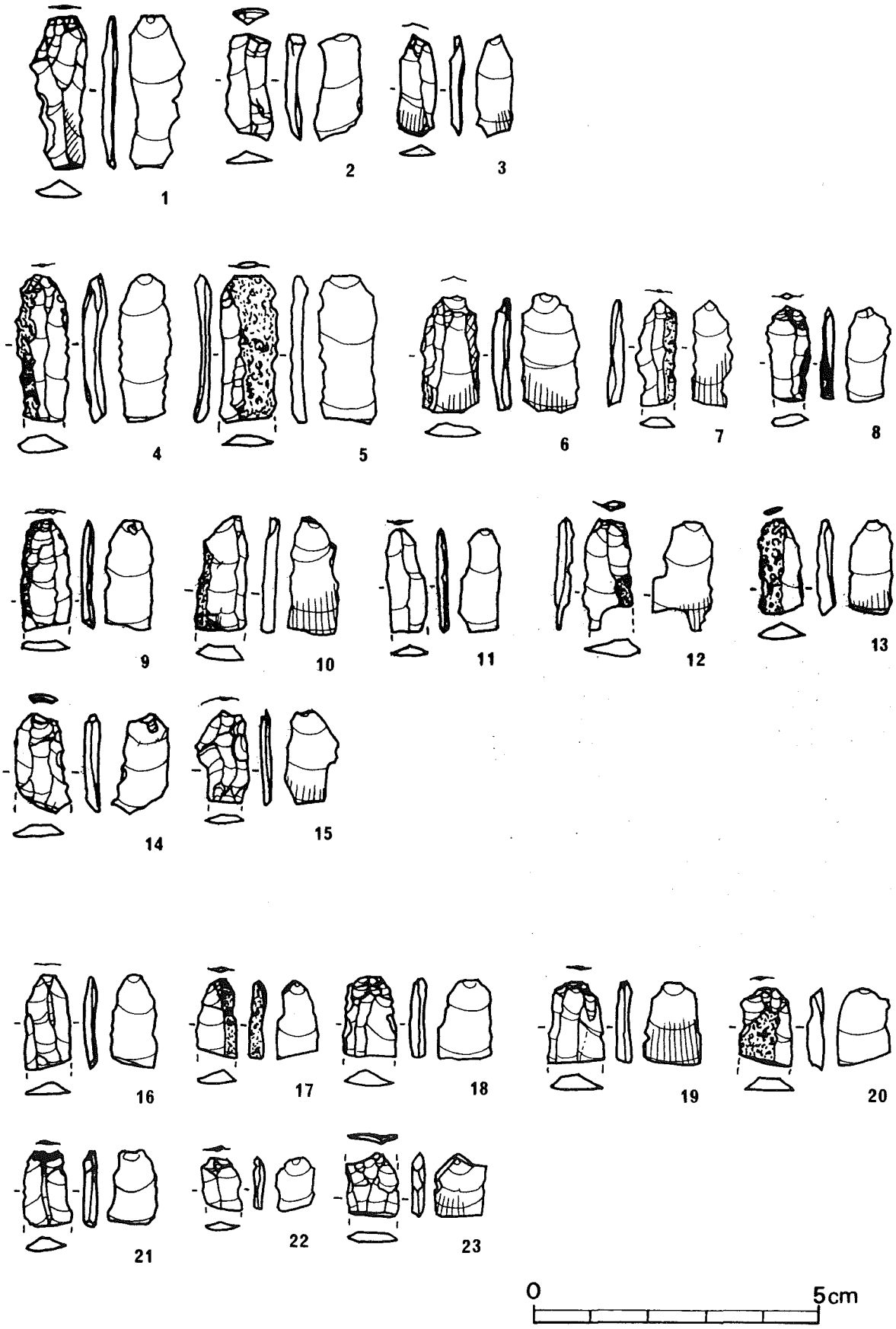
茶園型細石核とよばれるもので，背面（細石刃剥離作業面の反対側）が自然面で構成されることを特徴とする。打面角は60°で急斜である。打面は１回の大きな剥離で形成された面に細石刃剥離作業面側から細調整が施されているがこの調整が打面調整に伴うものか作業面再生のものかは判断できない。側面をみると背面はほぼ直線となっており，平たい円礫から剥出した剥片のうち平坦な自然面をもつ部分を選択している。本細石核は，打面再生に失敗しており，打面側を大きく欠損したため放棄されたものであろう。

③加工痕のある剥片（第９図52）

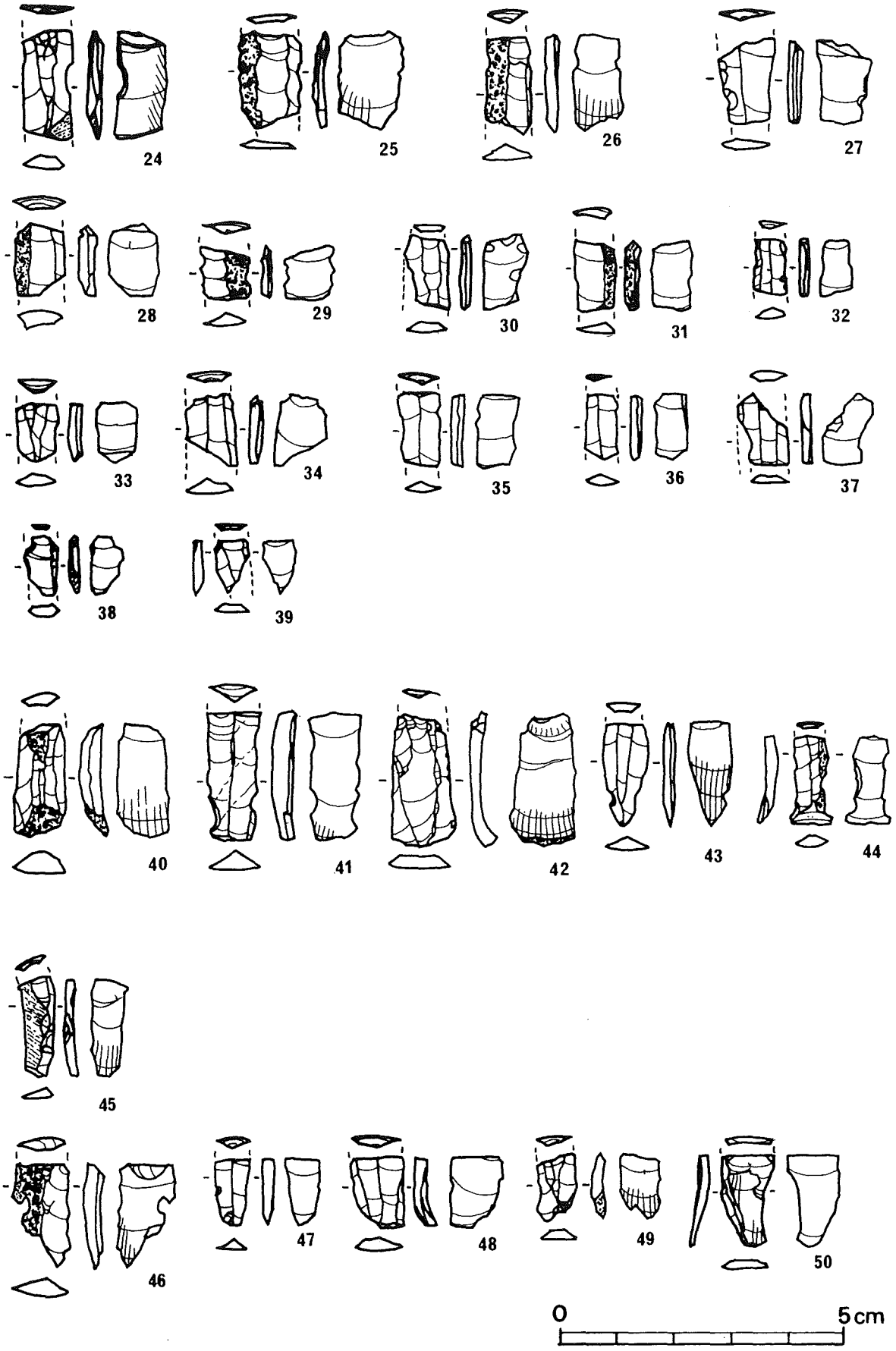
小円礫の斜めに断ち切った形状をなし，自然面以外のエッジに主要剥離面側からリタッチが入る。刃部以外は礫面を残している。

④打面再生剥片（第９図53・54）

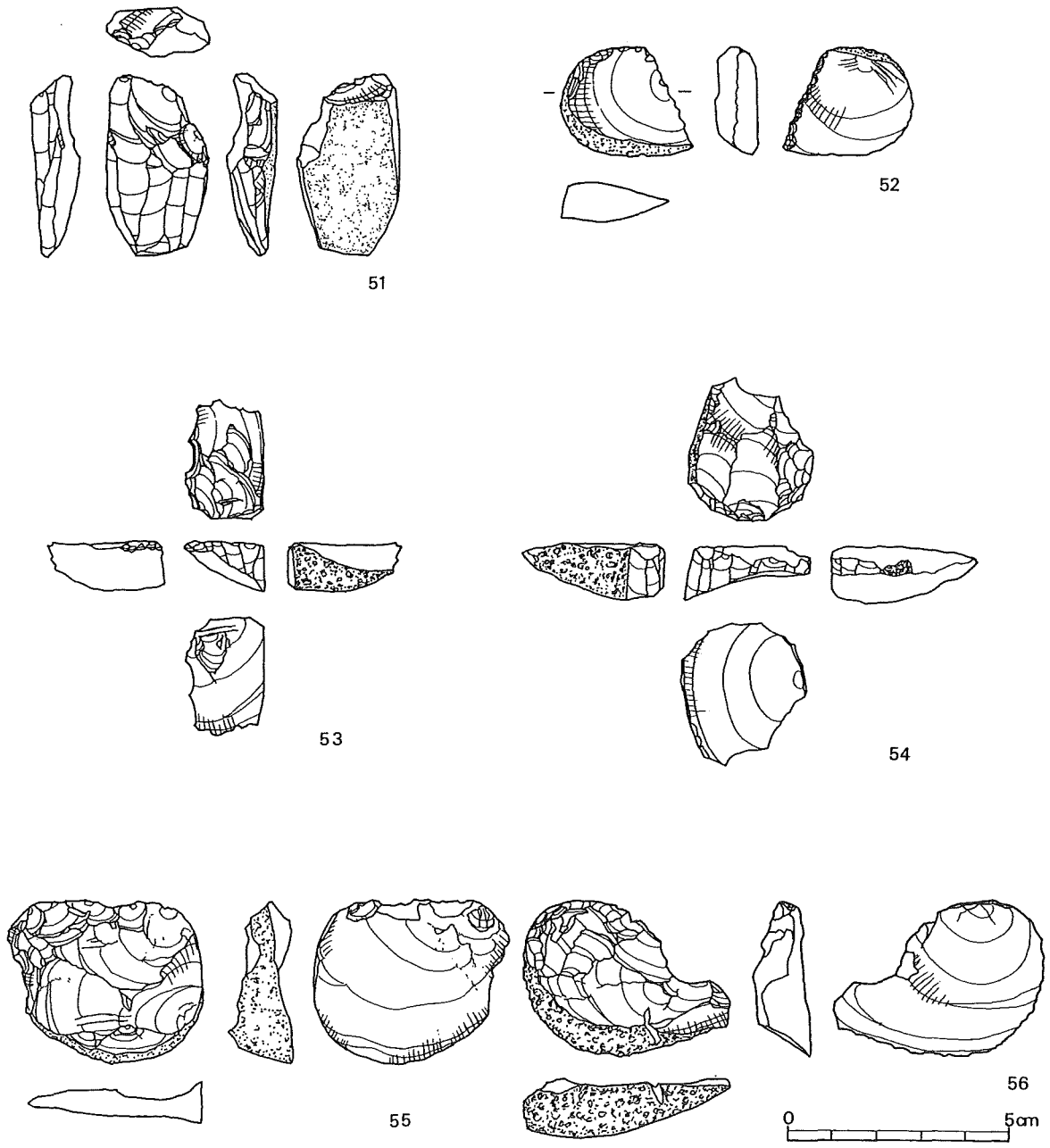
細石核の打面部分を輪切り状に再生したもので，細石刃剥離の樋状剥離面を一端に残しており，その形状から野岳・休場型の細石核に伴うものである。53は細長い打面をもつ細石核の打面再生剥片である。54は円筒形に近い形状の細石核の打面再生剥片である。いずれも野岳・休場型細石核に伴うものであるが，この２点に伴う細石核は遺跡外に搬出されたものと思われ，今回の調査では検出できなかった。



第７図　遺物実測図①


24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
5cm

第８図　遺物実測図②



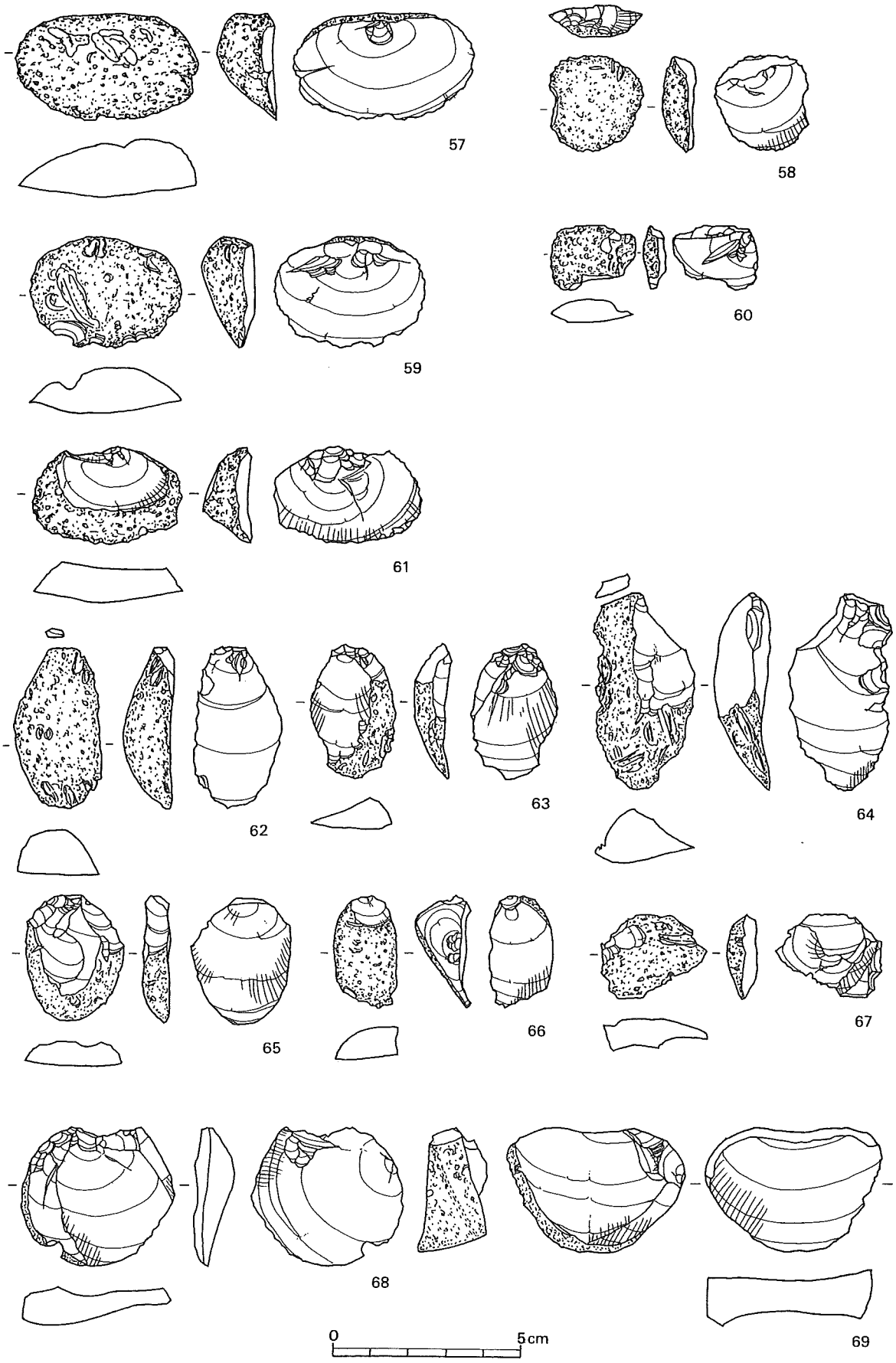
第９図　遺物実測図③

⑤打面調整剥片（第11図70～79）

ほとんどが小型の横長を基調とする寸詰まりの不定形剥片であるが，いずれの剥片の正面には鱗状の調整剥離が施されており，打面調整剥片もしくは打面再生剥片と理解した。73は細石核と接合する資料である。

⑥剥片類（第10図57～69）

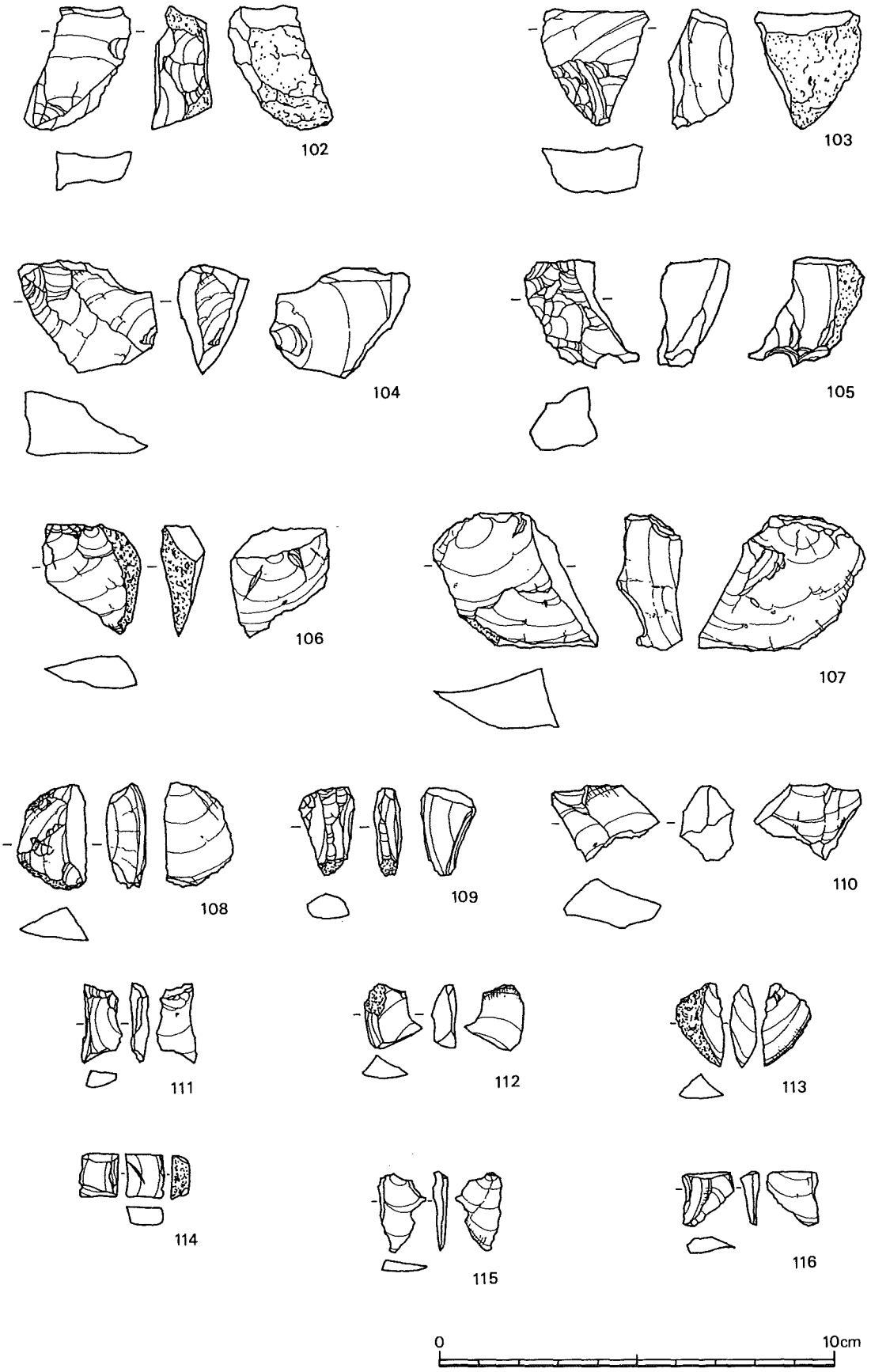
ここには円礫のシャッポを剥ぐように剥離したものと輪切り状の剥片を載せた。57～61は，幅広剥片である。62～66は縦長に剥離したものである。68・69は接合する輪切り状の剥片である。69は細石核の素材にもなりうるものであるが，いずれの剥片も使用された形跡がない。



第10図　遺物実測図④

70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
0
5cm

第11図　遺物実測図⑤


102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
0
10cm

第12図　遺物実測図⑥

図版番号	遺物番号	器種	黒曜石原産地	個体別資料	重さ	長さ	幅	厚さ
1	8	細石刃	腰岳系	い	0.48	27.0	9.7	2.1
2	排7	細石刃	腰岳系	い	0.31	18.1	7.9	2.5
3	19	細石刃	腰岳系	あ	0.21	17.6	7.2	2.1
4	K5	細石刃	腰岳系	い	0.73	25.1	8.9	3.5
5	87	細石刃	腰岳系	い	0.66	25.9	10.9	2.2
6	4	細石刃	腰岳系	あ	0.48	20.5	9.6	2.4
7	K7	細石刃	腰岳系	あ	0.24	17.7	6.6	1.6
8	排3	細石刃	腰岳系	い	0.21	16.5	7.5	1.9
9	K1	細石刃	腰岳系	あ	0.37	19.4	8.7	1.9
10	33	細石刃	腰岳系	い	0.4	19.9	8.4	1.8
11	82	細石刃	腰岳系	あ	0.24	17.9	7.2	1.8
12	50	細石刃	腰岳系	あ	0.40	18.8	10.6	2.6
13	18	細石刃	腰岳系	う	0.35	16.3	7.5	2.5
14	71	細石刃	腰岳系	あ	0.34	17.7	9.8	2.0
15	25	細石刃	腰岳系	あ	0.17	15.5	8.6	1.5
16	43	細石刃	腰岳系	あ	0.28	16.0	8.5	2.0
17	46	細石刃	腰岳系	い	0.21	13.7	7.1	2.5
18	排6	細石刃	腰岳系	あ	0.33	13.4	9.3	2.4
19	41	細石刃	腰岳系	い	0.30	14.4	9.7	2.1
20	10	細石刃	腰岳系	あ	0.33	12.8	9.7	2.9
21	49	細石刃	腰岳系	あ	0.18	12.9	8.5	1.9
22	65	細石刃	腰岳系	あ	0.08	9.3	6.5	1.8
23	22	細石刃	腰岳系	あ	0.24	11.2	9.7	2.1
24	17	細石刃	腰岳系	い	0.45	19.3	8.7	2.3
25	K16	細石刃	腰岳系	あ	0.46	16.7	11.0	2.0
26	32	細石刃	腰岳系	あ	0.38	16.8	8.2	2.5
27	26	細石刃	腰岳系	い	0.30	13.8	10.2	1.9
28	48	細石刃	腰岳系	う	0.28	12.8	8.8	2.5
29	89	細石刃	腰岳系	あ	0.13	8.9	9.2	1.8
30	K8	細石刃	腰岳系	い	0.21	12.9	8.0	1.9
31	45	細石刃	腰岳系	い	0.17	12.4	7.8	2.1
32	排4	細石刃	腰岳系	い	0.10	9.1	6.0	1.5
33	28	細石刃	腰岳系	い	0.21	10.0	7.4	2.2
34	K3	細石刃	腰岳系	あ	0.19	12.7	9.6	2.0
35	36	細石刃	腰岳系	い	0.18	12.3	7.1	1.7
36	93	細石刃	腰岳系	い	0.09	10.9	5.5	1.2
37	95	細石刃	腰岳系	う	0.14	12.0	8.3	1.4
38	86	細石刃	腰岳系	あ	0.10	10.2	5.5	1.8
39	27	細石刃	腰岳系	い	0.05	9.3	5.2	1.0
40	35	細石刃	腰岳系	え	0.67	19.6	9.1	3.6
41	6	細石刃	腰岳系	あ	0.61	22.1	9.1	3.1
42	31	細石刃	腰岳系	い	0.62	23.0	11.5	3.8
43	30	細石刃	腰岳系	あ	0.25	17.5	7.7	2.4
44	38	細石刃	腰岳系	あ	0.17	15.2	7.6	1.8
45	94	細石刃	腰岳系	い	0.15	17.4	5.7	1.7
46	66	細石刃	腰岳系	い	0.38	19.0	10.5	2.0
47	42	細石刃	腰岳系	い	0.09	11.1	5.6	1.8
48	44	細石刃	腰岳系	い	0.26	12.1	9.8	1.9
49	24	細石刃	腰岳系	い	0.13	10.9	7.2	2.1
50	排5	細石刃	腰岳系	い	0.12	15.7	9.2	1.4
51	排1	細石核	腰岳系	a	8.94	39.6	23.3	9.8
52	3	加工痕剥片	腰岳系	b	6.13	27.3	29.9	9.0
53	13	打面再生剥片	腰岳系	b	4.06	24.3	28.5	8.3
54	37	打面再生剥片	腰岳系	d	8.83	30.6	29.4	11.6
55	21	打面再生剥片	腰岳系	h	14.92	40.7	45.2	13.2
56	77	打面再生剥片	腰岳系	単	14.39	34.5	48.5	11.7
57	75	剥片	腰岳系	単	19.81	27.7	47.0	14.1
58	5	剥片	腰岳系	c	5.12	24.9	24.2	8.2
59	74	剥片	腰岳系	d	14.19	29.0	39.7	13.6
60	K6	剥片	腰岳系	i	1.97	16.5	21.7	6.0

図版番号	遺物番号	器種	黒曜石原産地	個体別資料	重さ	長さ	幅	厚さ
61	1	剥片	腰岳系	単	12.12	41.7	22.4	12.5
62	15	剥片	腰岳系	単	11.15	25.4	39.8	15.3
63	2	剥片	腰岳系	c	4.88	34.7	22.0	8.4
64	55	剥片	腰岳系	i	14.53	49.6	26.3	13.6
65	9	剥片	腰岳系	c	5.87	32.5	25.7	6.7
66	K2	剥片	腰岳系	j	11.46	40.0	37.5	9.2
67	72	剥片	腰岳系	c	3.62	20.3	28.4	7.8
68	排2	剥片	腰岳系	g	6.35	28.5	18.9	15.3
69	90	剥片	腰岳系	g	25.31	34.2	47.1	21.0
70	76	打面調整剥片	腰岳系	c	1.73	20.1	22.7	4.9
71	K17	打面調整剥片	腰岳系	e	2.41	22.3	22.7	7.3
72	K11	打面調整剥片	腰岳系	e	1.74	23.7	20.4	4.2
73	14	打面再生剥片	腰岳系	a	0.85	15.0	18.6	4.3
74	K14	打面調整剥片	腰岳系	c	1.14	17.7	22.5	3.4
75	K10	打面調整剥片	腰岳系	f	1.03	17.1	21.3	3.9
76	29	剥片	腰岳系	c	0.93	18.0	20.8	4.3
77	47	剥片	腰岳系	e	1.30	19.9	15.9	6.0
78	K9	剥片	腰岳系	e	1.81	20.4	21.4	6.1
79	67	剥片	腰岳系	c	0.99	16.2	19.8	3.9
80	92	剥片	腰岳系	d	1.23	16.3	21.4	4.7
81	11	剥片	腰岳系	h	2.52	17.0	29.9	4.0
82	70	剥片	腰岳系	b	2.31	26.2	19.8	6.3
83	60	剥片	腰岳系	h	1.37	12.7	27.8	4.4
84	51	剥片	腰岳系	f	1.25	24.4	19.4	3.6
85	56	砕片	腰岳系	d	1.02	15.6	17.7	4.7
86	59	砕片	腰岳系	h	0.99	14.4	21.5	3.7
87	79	砕片	腰岳系	f	0.91	19.4	18.9	4.7
88	64	砕片	腰岳系	f	0.85	11.6	23.4	3.6
89	81	砕片	腰岳系	f	0.96	18.8	18.5	3.3
90	20	砕片	腰岳系	j	0.63	10.8	18.8	4.0
91	84	砕片	腰岳系	h	1.22	13.6	20.5	6.8
92	K4	砕片	腰岳系	h	0.60	22.0	16.9	2.0
93	K13	砕片	腰岳系	e	0.76	13.5	19.1	4.5
94	96	砕片	腰岳系	e	0.54	17.0	13.4	3.4
95	57	砕片	腰岳系	b	0.34	17.0	10.0	2.2
96	53	砕片	腰岳系	c	0.32	15.1	10.0	2.1
97	61	砕片	腰岳系	e	0.23	8.8	13.9	2.4
98	52	砕片	腰岳系	c	0.21	10.4	10.4	2.2
99	58	砕片	腰岳系	e	0.09	10.6	9.4	0.9
100	85	砕片	腰岳系	c	0.05	7.8	7.1	1.4
101	69	砕片	腰岳系	h	0.11	8.5	9.0	2.1
102	16	剥片	土器田系	k	11.73	36.9	26.3	14.0
103	7	剥片	土器田系	k	10.79	28.7	33.1	16.3
104	68	剥片	土器田系	k	9.76	39.1	27.6	17.2
105	80	剥片	土器田系	k	7.42	35.5	24.0	15.6
106	12	剥片	土器田系	k	4.67	27.0	33.6	11.0
107	40	剥片	土器田系	k	15.29	30.5	48.5	14.8
108	39	剥片	土器田系	k	3.76	26.7	17.3	9.1
109	91	剥片	土器田系	k	1.96	13.4	22.4	6.9
110	83	剥片	土器田系	k	4.18	22.9	21.8	13.2
111	62	砕片	土器田系	k	0.78	19.8	13.3	3.6
112	23	砕片	土器田系	k	0.91	16.1	14.6	5.9
113	73	砕片	土器田系	k	0.97	14.3	20.4	6.7
114	54	砕片	土器田系	k	0.63	9.2	11.2	4.1
115	63	砕片	土器田系	k	0.40	19.6	11.7	3.6
116	K12	砕片	土器田系	k	0.52	12.0	17.8	4.2

⑦剥片類（第11図80～84）

横長を基調とする不定形剥片のもの（80～83）と縦長を基調とするもの（84）に分かれる。石器の素材となるものとは思われない。

⑧砕片類（第11図85～101）

いずれも小片で，細石器製作にかかわるものどうかは不明である。

⑨剥片類（第12図102～110）

良質ではないおそらく１個体の針尾・土器田系の青灰色黒曜石を素材とする。原礫を分割するような剥離で，打点も一定しない。

⑩砕片類（第12図111～116）

109は細かな加工もみられるが，その他は何らの調整もみられない。

第３章　まとめ

第１節　百花台遺跡群における細石器文化研究素描

和島・麻生の調査で百花台Ⅱ文化層から出土した細石核を，麻生・白石は大きく３形態４型式に分類した（麻生・白石1976）。それによると第Ⅰ形態は舟底型を呈し，ａ型・ｂ型に細分され，西海技法の影響下にある楔形細石核である。第Ⅱ形態，第Ⅲ形態は，小円礫を素材とするいわゆる「野岳・休場型細石核」である。麻生・白石は，百花台遺跡の細石核の出土状態から，Ⅰ～Ⅲ形態が同時共存することが最大の特徴であり，しかも，ナイフ形石器が確実に共伴するという。こうしたあり方から細石器の編年作業の再検討する必要性を説いている。野岳・休場型と西海技法によるものが共伴するという事実は当時の編年観（小円礫素材のいわゆる「野岳・休場型」を土器段階以前と理解する考え方）に一石を投じるものであった。

小畑弘己も百花台遺跡に注目している。百花台遺跡Ｓ地点から採集された資料をもとに，細石核を２類に分類する（小畑1982）。Ⅰ類は楔形（舟底形）を呈するもの，Ⅱ類はⅠ類以外のすべてのものを含めるが基本的には野岳・休場型を基本とするとしている。Ⅰ類は麻生・白石のⅠａ形態と，Ⅱ類が麻生・白石のⅠｂ・Ⅱ・Ⅲ形態となる。さらに小畑はＳ地点の細石器石器群がⅠ類とⅡ類が共伴するならば土器出現直前かそれ以後の段階におけるとした。つまり小畑の見解ではⅡ類の「半舟底形細石核」は細石刃の初期から終末期まで存続する息の長いものという理解であった。

百花台遺跡群の細石器石器群は，その後県教委の県道国見雲仙線の調査によって出土例は増加している。しかし公園部分の百花台Ｄ遺跡は，4000㎡と広大な面積にのぼるものの，細石器の出土はきわめて稀である。その中で，２点の細石核がもっとも土黒川によったＤ地区のⅡ層から出土していることは注目に値する。一方土黒川に沿った火山性山麓扇状地の西端を通る県道国見雲仙線の調査では，数カ所の細石器出土地点として，標高の低い方から，百花台Ｂ遺跡で３ヵ所，百花台Ｄ遺跡で１ヵ所と大きく離れた魚洗川Ｄ遺跡の４ヵ所の集中部分が明らかになっている。百花台Ｂ遺跡と百花台Ｄ遺跡の細石器石器群は，麻生・白石報告のそれとほぼ同様の内容である。剥片を素材とした横打打面調整と背縁・下縁調整を有する西海技法に準じた細石核と小円礫素材の細石核に不定型な黒曜石素材の細石核を組成する。土器出現以後の所産と判断して大過ないであろう。魚洗川Ｄ遺跡は細石器石器群を出土する百花台遺跡群のなかでは約300mともっとも標高が高く，距離的にも500mほど離れている。

その細石器石器群は，素材として針尾島古里海岸の乳白色黒曜石を使用するまとまりのある一群で，しかも真性の西海技法で作成された楔形を呈する細石核である。

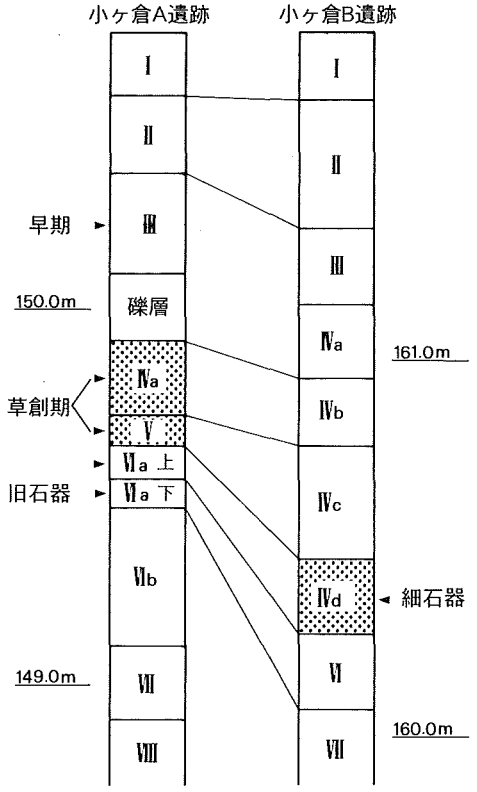
百花台遺跡群の細石器石器群の研究は，麻生・白石（1976），小畑（1982）以来ほとんど進展していない。その要因の一つとして，長崎県教育委員会の調査において良好な出土状態での検出例がなかったことがあげられよう。つまり百花台遺跡群の細石器石器群は百花台Ⅲ層を主たる包含層とするものの，Ⅲ層が締まりのない黒色火山灰土であり，上下の文化層の遺物が混在する不安定な層であったことから石器組成などの面で石器群の明確な分離が困難であったことや後期旧石器段階の百花台Ⅳ層（礫石原火砕流堆積物，いわゆるカシノミ層）からは細石器石器群は検出されなかった。

近年国見町教育委員会が調査した小ヶ倉Ａ遺跡は小面積ではあるものの，きわめて興味深いものがある（辻田・竹中2003）。TP-10区から細石器と土器が共伴して出土した。県内５例目となった。土器は大量で総数400点を超えるものの細片が多く，口縁部形態からみて最低３個体を数える。辻田・竹中はＡ～Ｃの３類に分類しているが，いずれも押引文土器段階（泉福寺洞穴５層段階）と考えて大過ないであろう。共伴する細石核は，片面に自然面をもつ大振りの剥片素材もので背縁調整が丁寧に施されている。打面は作業面側からなされており，主要剥離面側に擦痕が残っている。また20mほど離れたTP-７区からは攪乱状態ではあるものの２点の細石核が出土している。一つは自然面を大きく残す小礫を素材としたもので，もう一例は細長い打面と打面の横打調整からみて福井型と思われるものである。TP-７でみられるあり方は従来百花台遺跡群で検出されてきたものと同様で，辻田・竹中が指摘するとおり縄文時代草創期の「新しい野岳・休場型」であろう。TP-７からは土器は出土していないが，両者はそれほど時間的に離れたものとは考えられず，TP-７がTP-10よりも若干古く，おそらくTP-10のあり方が細石器文化の最終末の姿といえよう。

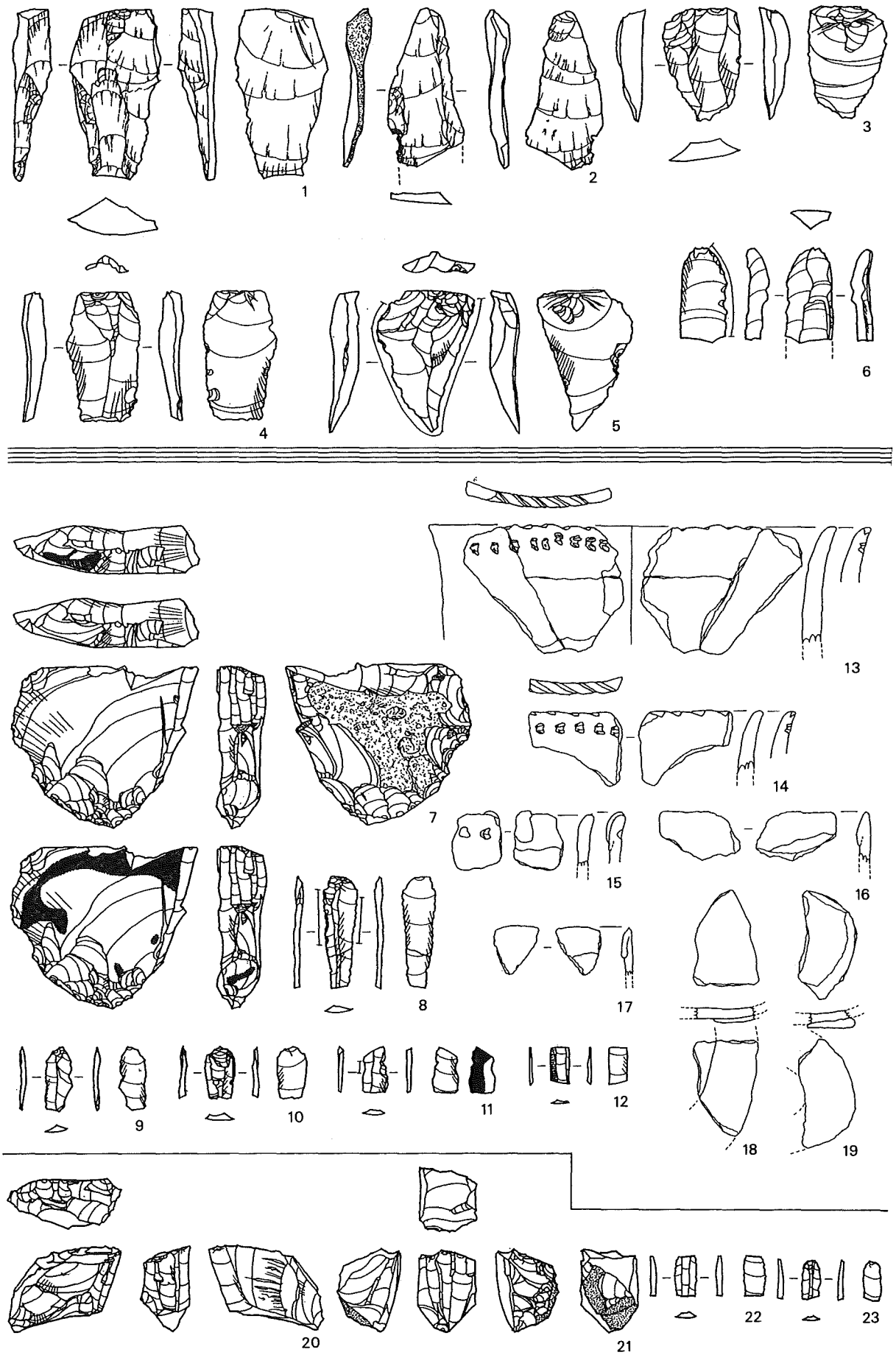
第２節　百花台遺跡群の細石器石器群

麻生の調査では，細石器石器群はⅢ層から出土しており，それはその後の県教委の調査でも変わらない傾向である。ところでⅢ層は軟質の黒色火山灰土で，土壌化が進行しており，Ⅳ層を主たる包含層とする百花台型台形石器やナイフ形石器あるいは縄文時代早期の土器・石器など上下の時期差のある遺物が混在している。麻生の調査地点は，上下の攪乱のないきわめて恵まれた地点であったといえよう。

ところで小ヶ倉Ａ遺跡および小ヶ倉Ｂ遺跡ではともに礫石原火砕流堆積物（Ⅳ層）から細石器が出土している。わずか200m程度しか離れていない両遺跡の層位を比較すると鍵層が２層ある。上位からＡ遺跡で土器と細石器が共伴したⅣａ層とＢ遺跡では無遺物層であったⅣｂ層が同一の層であり，角閃石安山岩を多量に含むきわめて硬質の黒色火山灰土層



第13図　小ヶ倉・小ヶ倉B遺跡の土層比較図（辻田・竹中2003改変）



第14図　小ヶ倉A遺跡 出土遺跡

である。次はＡ遺跡のⅥ下層とＢ遺跡のⅥ層で，黄褐色の締まりのよい土層で，小ヶ倉Ａ遺跡ではナイフ形石器の素材と思われる縦長剥片を出土している。百花台Ⅳ層がこのことから小ヶ倉Ｂ遺跡と小ヶ倉Ａ遺跡の細石器石器群は層位的に分離できる形で検出された状態と理解できよう。土壌化した礫石原火砕流堆積物の再堆積が数回発生したことが考えられる。また層位的にみても小ヶ倉Ｂ遺跡が層位的に小ヶ倉Ａ遺跡よりも下位層から出土していることは確実である。

百花台Ⅳ層（礫石原火砕流堆積物）のＣ^{14}年代は，13,000or14,000年B.P.と19,000年B.P.の２例がある。ここで注目すべきは前者の年代である。この年代に依拠する限り，百花台Ⅳ層の上位層である百花台Ⅲ層あるいはⅡ層から出土する細石器石器群は基本的は13,000年B.P.よりも後出とみなければならない。小ヶ倉Ａ遺跡で測定された２つの年代，腐食土壌の12370±50年B.P.と炭化物14070±70年B.P.はこれときわめて整合的である。つまり再堆積した礫石原火砕流堆積物のなかの年代として，前者は小ヶ倉Ａ遺跡TP-10区の細石器石器群の年代を示しており，後者は礫石原火砕流発生当時の年代を示していると考えられる。

最後に百花台遺跡群の細石器石器群の編年の見通しを述べる。この地に最も早く登場した細石器石器群は，後期旧石器段階末期の茶園型，野岳・休場型細石核をもつ一群で小ヶ倉Ｂ遺跡を代表とする。これに次ぐのが縄文時代草創期古段階の純然たる福井型をもつ魚洗川Ｄ遺跡の一群があたる。さらにそれらより新相の一群として，見かけ上は福井型になるものの側面調整や打面調整を簡略化したもの，板状素材を用いるものとそれと伴う百花台型細石核の一群という，麻生・白石の百花台遺跡や長崎県教育委員会の調査で検出された百花台Ｂ遺跡・百花台Ｄ遺跡，小ヶ倉Ａ遺跡TP-７区が該当する。
もっとも新しいものとして小ヶ倉Ａ遺跡TP-10区をあてることができよう。このように百花台遺跡群における細石器石器群はその大部分が土器出現以後の縄文時代草創期に位置づけることができる。

（３）小ヶ倉Ｂ遺跡での作業の復元

小ヶ倉Ｂ遺跡の石器組成をみると，細石刃50点・細石核１点・細石刃剥離作業面の打面再生剥片３点・打面再生もしくは調整剥片10点，加工痕のある剥片１点，剥片31点，砕片23点からなり，単純である。細石器以外の狩猟具を持たず，掻器・削器などの加工具も装備していないし，遺物の数量も限られており，複数回の回帰を想定できる状況にはない。

遺跡に残された細石核は，扁平な茶園型であるが，背面に残された自然面からみて松浦牟田産のものを素材とするものとみられる。細石刃の剥離作業は進行しており，作業面の再生に失敗したため遺跡内に遺棄されたものであろう。またこの細石核の製造に関係する剥片・砕片がみられないことから搬入された可能性が高い。次に細石刃剥離作業面を取り込んだ打面再生剥片（第９図53・54）は一側面が自然面になるもので２点出土しているが，これに関係する細石核は検出されておらず，遺跡外へ搬出された可能性が高い。小ヶ倉Ｂ遺跡では最低でも３点の細石核が使用され，そのうち２点は遺跡外へ搬出されたものと思われる。

このように茶園型のような扁平な細石核をもつ細石器石器群は，石器組成として非常に貧弱でもっぱら細石刃剥離作業に専念している例が多い。たとえば大分県天瀬町の亀石山遺跡や熊本県河原第３遺跡などでも，大量の細石刃と細石核形成に関わる資料が圧倒的である。小ヶ倉Ｂ遺跡もそうした例の一つであろう。

【引用参考文献】

麻生　優1965「石器文化の性格 4細石器文化」『日本の考古学』1　河出書房新社

麻生優・白石浩之1984「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』第３巻　雄山閣

小畑弘己1982「百花台遺跡Ｓ地点の石器群」『赤れんが』第２号　赤れんが出版会

織笠　昭1991「西海技法の研究」『東海大学紀要文学部』54

下川達彌1978「諫早市位牌塔遺跡の調査」『長崎県立美術博物館だより』35

下川達彌1979「日本最西端の旧石器資料」『考古学ジャーナル』167

下川達彌1982「旧石器時代の長崎」『森貞次郎博士博士古希記念古文化論集』

下川達彌・萩原博文1983「西北九州における旧石器時代石器群の編年（上）（下）」『古代文化』35-6,35-9

鈴木忠司1971「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』第23巻第3号　古代学協会

橘　昌信1973「九州における細石器文化　－細石核の分類と編年試論－」『考古学論叢』1　別府大学考古学研究会

副島和明編1989『魚洗川Ｂ遺跡』（長崎県文化財調査報告書第95集）長崎県教育委員会

田川 肇編1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』（長崎県文化財調査報告書第116集）長崎県教育委員会

田川　肇・副島和明編1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』（長崎県文化財調査報告書第92集）長崎県教育委員会

辻田直人・竹中哲朗2003「【調査報告】長崎県国見町における縄文時代草創期遺跡の調査－小ヶ倉Ａ遺跡の遺跡範囲確認調査から－」『西海考古』第５号　西海考古同人会

長岡信治・田島俊彦1998「雲仙火山北麓の稗田原遺跡のテフラ層序」『稗田原遺跡Ⅱ』（長崎県文化財調査報告書第145集）長崎県教育委員会

萩原博文1989「西日本の細石器文化」『考古学ジャーナル』306

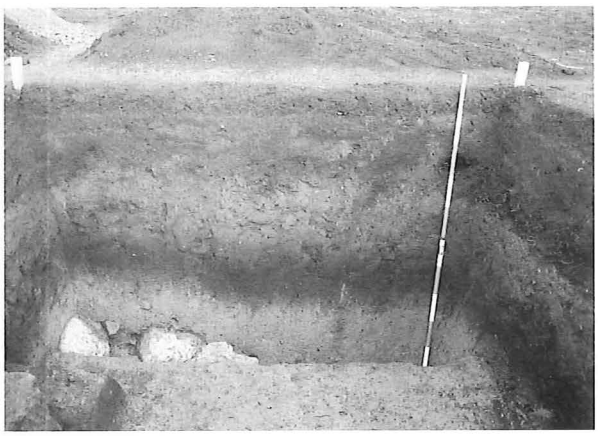
橋本勝雄1983「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について－第二・三層を中心として－」『考古学論叢』1

森浩一・松藤和人編1994『百花台東遺跡』（同志社大学文学部考古学調査報告第８冊）同志社大学文学部文化学科

星住英夫・渡辺一徳1996「新期雲仙火山に由来する火砕流堆積物と広域テフラ」『第四紀露頭集－日本のテフラ－』

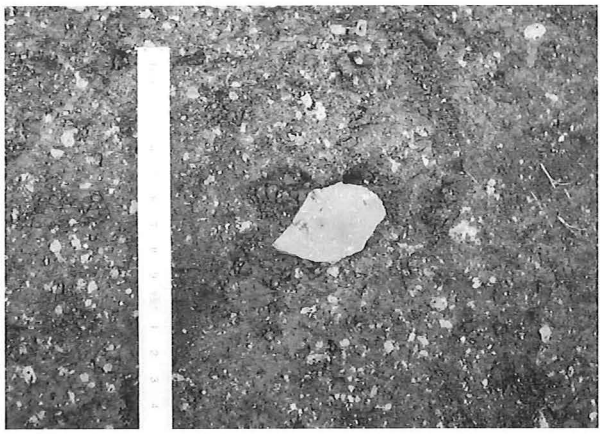
図　　版

図版1　調査風景



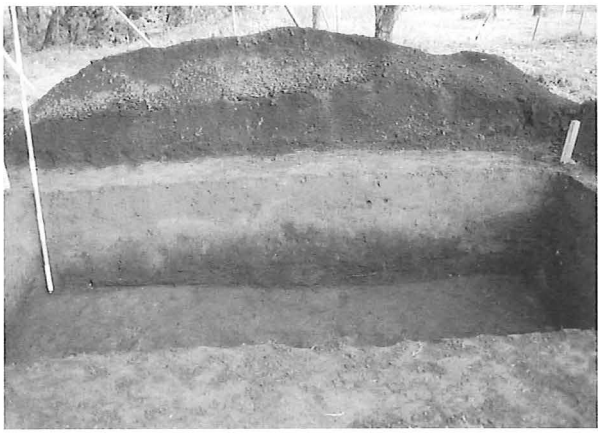
図版2　TP-3　北壁土層断面

図版3　TP-4　遺物出土状態

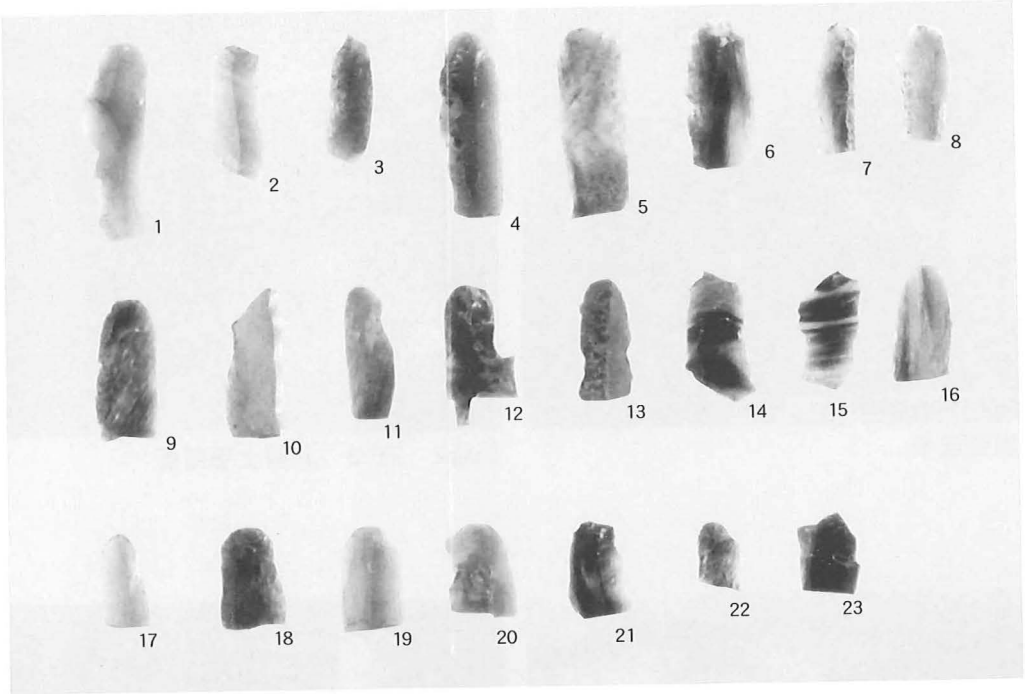


図版4　TP-4　遺物出土状態

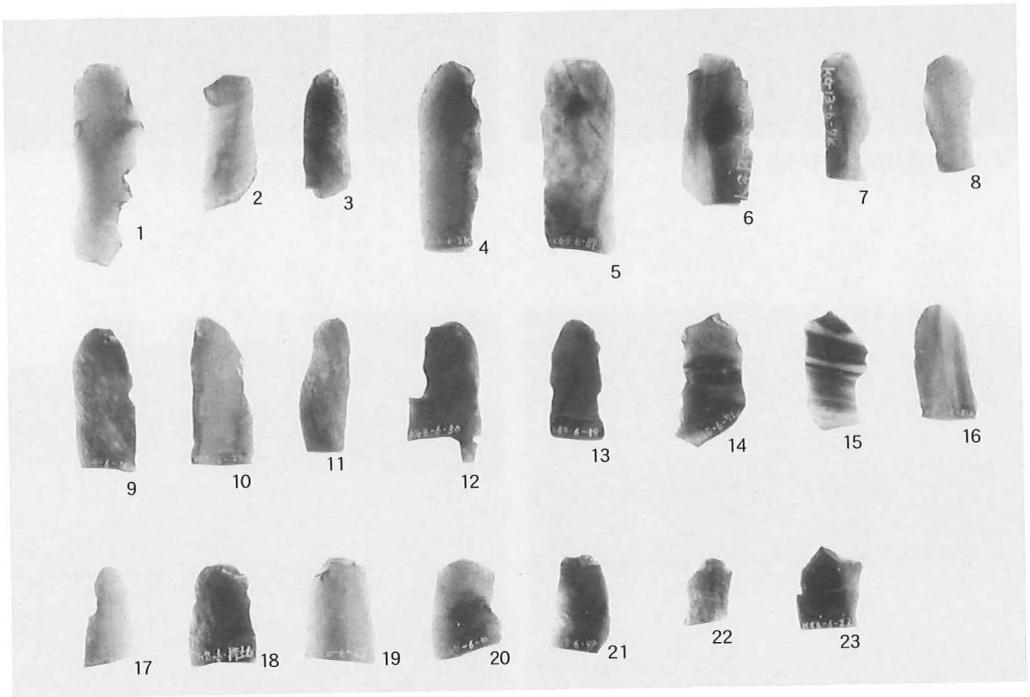
図版5　TP-4　北壁土層断面



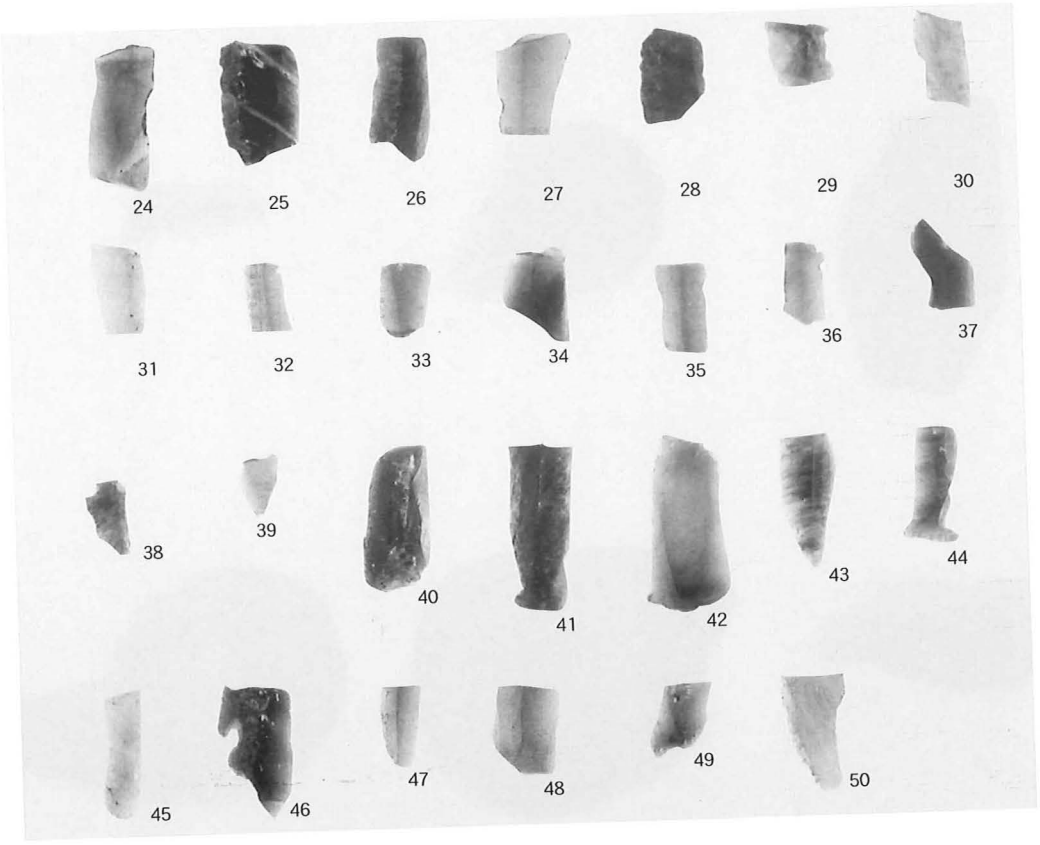
図版6　TP-7　東壁土層断面



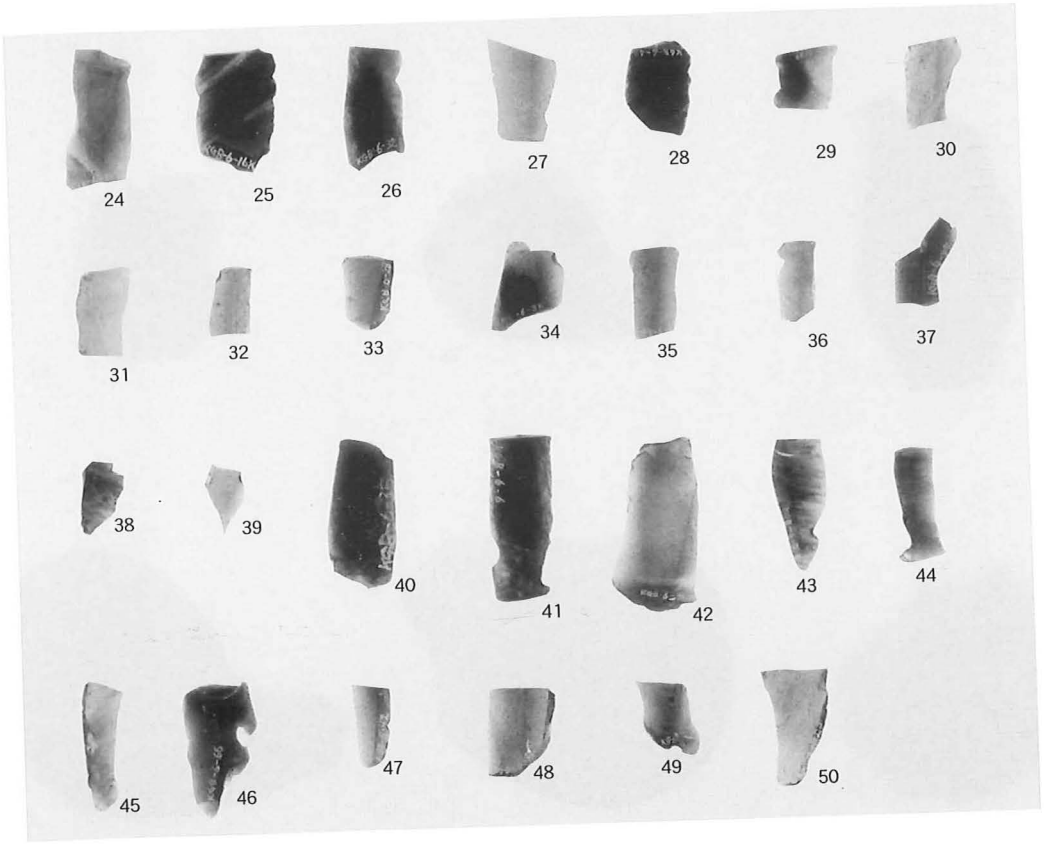
図版7　細石刃1(表)



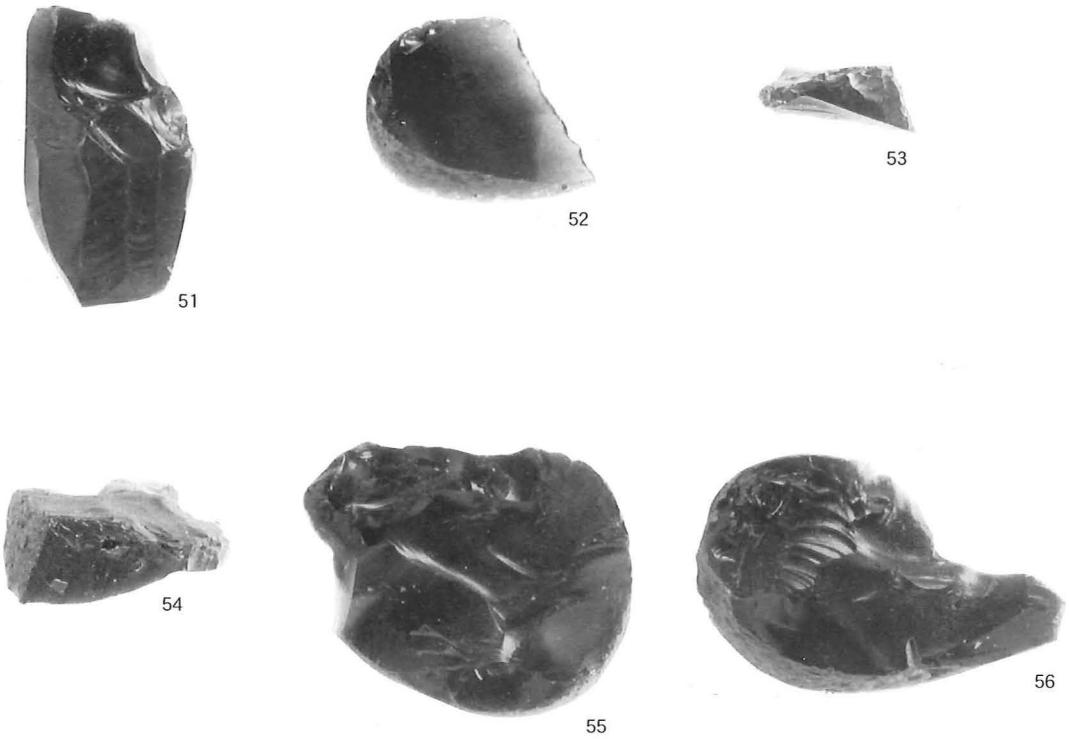
図版8　細石刃1(裏)

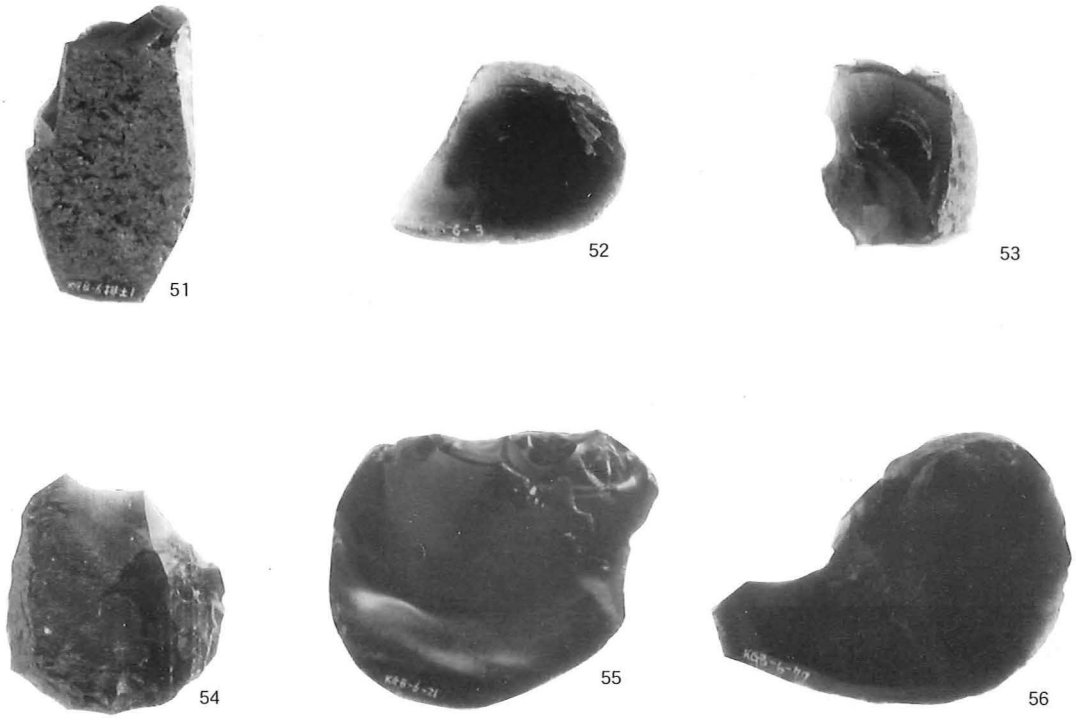


図版9　細石刃2(表)



図版10　細石刃2(裏)

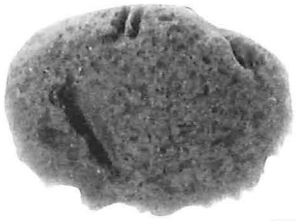




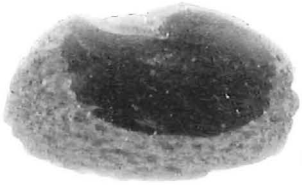
図版11　細石核・打面再生剥片（上段：表、下段：裏）

57

58


59

60


61

62

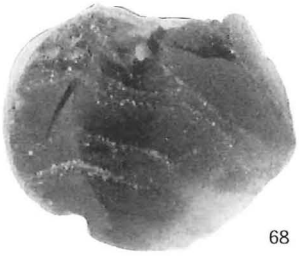
63

64

65

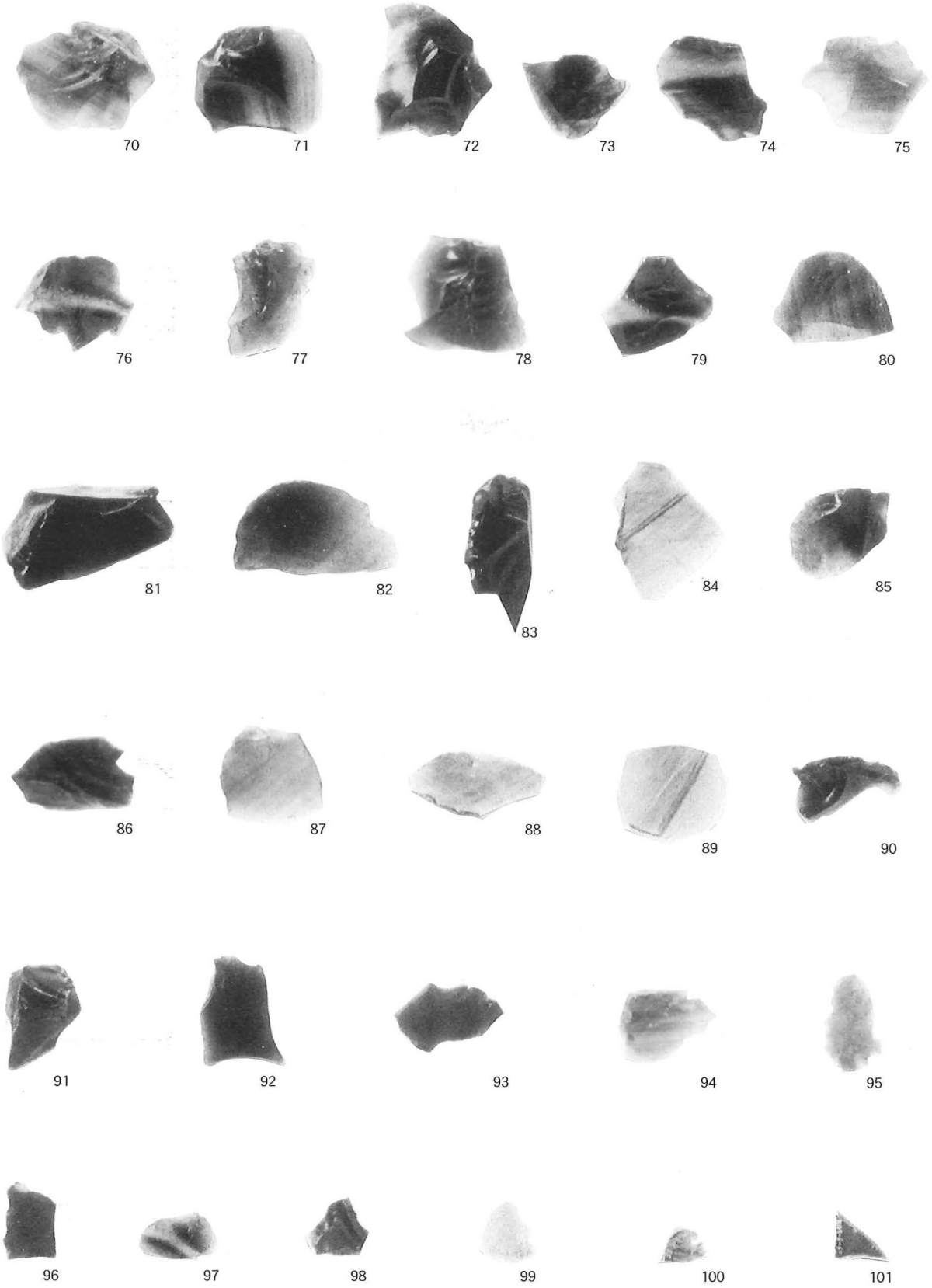
66

67


68

69

図版12　剥片


70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101

図版13　剥片類・砕片

102

103

104

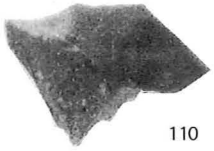
105

106

107

108

109

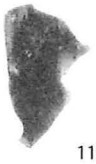

110

111

112

113

114


115

116

図版14　剥片・砕片

第Ⅱ部　大野原遺跡（有明町）

例　　言

1．本書は南高来郡有明町大三東に所在する大野原遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は長崎県教育庁学芸文化課が事業主体となり，有明町教育委員会の協力を得て，平成１５年１月２０日から同年１月３０日にかけて実施した。
3．調査関係者は次のとおりである。

調査担当	長崎県教育庁学芸文化課	主任文化財保護主事	古門雅高
		文化財調査員	本多和典
		文化財調査員	樋口健太郎
調査協力	有明町教育委員会	主事	宇土靖之

4．遺構の実測は調査は調査担当者がおこなった。
5．遺物の実測は石器は中村ヒロ子，土器は古門がおこなった。トレースは和田美加，浜崎美加，横田愛子，成田万里，拓本は冨永諭美の協力を得た。
6．本書における遺物・写真・図面は長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。

7　本書の執筆・編集は古門がおこなった。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境および調査履歴……39
　第１節　遺跡の地理的環境……39
　第２節　遺跡の歴史的環境……39
　第３節　調査の履歴……39
第Ⅱ章　調査……41
　第１節　層位……41
　第２節　調査区の概要……41
　第３節　遺構……43
第Ⅲ章　出土遺物……48
　第１節　土器……48
　第２節　石器……50

挿　図　目　次

第１図　大野原遺跡周辺の遺跡(S=1/25,000)……40
第３図　調査区周辺地形図(S=1/10,000)　(第２図は欠番)……41
第４図　調査区位置図①(S=1/2,500)……42
第５図　調査区位置図②(S=1/2,000)……43
第６図　試掘坑配置図(S=1/400)……44
第７図　Ｃ２－Ｄ　北壁土層図(S=1/40)……45
第８図　Ｆ４－ｂ　西壁土層図(S=1/40)……45
第９図　Ｔｒ５　北壁土層図, 平面図(S=1/40)……46
第10図　Ｃ２－ｂグリッド検出遺構平面図(未掘) (S=1/50)……47
第11図　Ｂ１－ｂ, Ｂ２－ｃグリッド検出遺構平面図(未掘) (S=1/50)……47
第12図　出土土器実測図(S=1/3)……49
第13図　出土石器実測図①(S=2/3)……50
第14図　出土石器実測図②(S=2/3)……51

図　版　目　次

図版１　……52

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境および調査履歴

第１節　遺跡の地理的環境（第１～４図）

大野原遺跡は有明町の北西部に位置する。海岸線までの距離は約１㎞で，往時はさらに海が迫っていたと考えられる。有明町は雲仙山塊から漸移的に標高を減じながら海岸線に至る地形である。町内周辺には百花台火山性扇状地，礫石原火山性扇状地が発達しており，その末端は有明海に弓なりに張り出した海岸線に達している。海岸付近には向ノ原段丘や大原段丘の低位段丘が発達している。扇状地は長い間の浸食により，大小の小谷を形成している。

扇状地の表層地質は火山起源の黒ボク層土壌で，しょうが，ばれいしょ，にんじん，ごぼう，ミカン，飼料作物などの栽培が盛んである。

大野原遺跡は礫石原扇状地の扇端に立地する。

第２節　遺跡の歴史的環境（第１図）

有明町は隣接する国見町とともに文化財が豊富に残る地域である。温暖な気候をもち，農業に適した畑地が形成され，有明海に近いこともあり，海産物も豊富である。

旧石器時代は国見町にまたがる百花台遺跡が知られる。縄文時代早期には丘陵部を中心に遺跡が散在する。前期，中期および後期前半はいまひとつ明確ではないが，後期後半になると大野原遺跡の拠点集落が形成される。後続する遺跡としては中田遺跡がある。弥生時代前期から中期にかけては明確ではないが，後期には一野遺跡で住居跡が確認されている。古墳時代には平山古墳などが散在する。律令時代には大野原遺跡付近が再び拠点地域となるようで，大野原七反畑遺跡では多くの須恵器，土師器が出土している。

第３節　調査の履歴

大野原遺跡の調査履歴については2001年に有明町教育委員会で刊行された報告書に詳しい（諫見編2001）ので詳細についてはそちらを参照されたい。

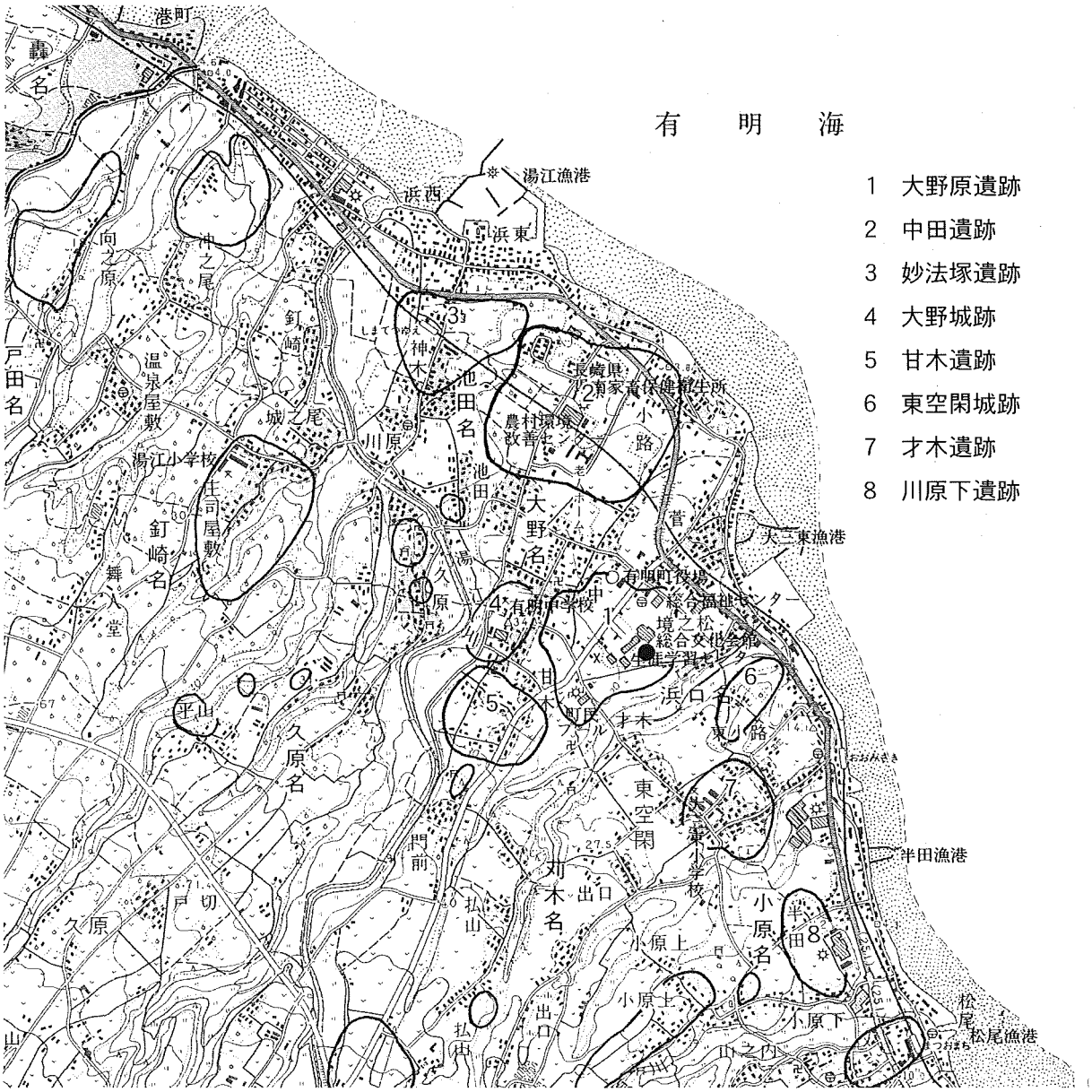
大野原遺跡の調査は1969年，1984～1985年に古田正隆を中心とした国見高校社研部などが実施しているが，いずれも正式な報告書が刊行されることなく現在に至っている。『有明町誌』に若干の調査成果が掲載されているが，十分な報告とはいえない。このことが大野原遺跡の具体的な内容が長い間知られなかった最大の原因である。しかも，調査者古田の恣意的な遺構解釈によってせっかくの調査成果が損なわれるという状況が長く続いた。

たとえば，『有明町誌』に報告された1969年（昭和44）の第１号土坑墓などは，なにを根拠に墓というのかわからない。堀り方から判断されるのはただの土坑で，中から若干の弥生中期初頭の城ノ越式土器片が出土したということである。第２号土坑は弥生時代の積石墓（集石墓）と報告された遺構である。これも弥生時代の遺構と認定した根拠が明確ではない。本県でこれまで確認された弥生時代の集石墓は福江市の一本木遺跡のみで，しかも弥生後期である。遺構がどの層から堀込まれたものかという視点が欠落しているために，墓という先入観に最後まで囚われる結果となっている。第３号土坑は土坑内から小形壺が出土し，付近より出土した石塊の存在から石蓋土坑墓としているが，「略々１トン近い」石材を石蓋土坑の蓋に使う例など皆無である。

以上の３基の土坑墓と称される遺構は，弥生中期初頭の包含層に堀込まれた後世の土坑や，土坑に廃棄された石を墓と誤認したものであると判断する。

古田らの調査によって大野原遺跡の内容がなかなか明確にならなかったわけだが，転機は1997年の町の文化会館建設に伴い，諫見富士郎によって約600㎡が調査されたことで訪れた。調査によって検出された遺構はピットや土坑などで，特に粘土の貯蔵土坑と焼土が充填した土坑が数基検出されている。調査者は土器製作が行われたとして，土器製作用の粘土を貯蔵した土坑と土器焼成遺構と判断し，報告しているが，状況証拠のみで，決めてとはなっていない。「縄文土器製造の一大工房」であったのかどうか検討する余地は残されている。

しかし，大型公共事業のための緊急発掘調査であったにもかかわらず，400頁を越える大部の報告書が刊行され，土器や石器などの図版も古田報告に比べると整備されており，さらには，文化会館に大野原縄文資料室として出土した資料の展示公開が行われているなど，有明町の文化財行政に寄与した部分は大きいといえる。



第１図　大野原遺跡周辺の遺跡(S=1/25,000)

第Ⅱ章　調査

第１節　層位（第７，８，９図）

大野原遺跡の基本層位は下記のとおりである。

第１層は表土（耕作土）で，この下に第１ｂ層とした 灰黒色土層がある。これは畑造成時の土で（青磁，プリントの染付，ガラスなど出土），この層は調査区の東側では，表土下60cm～70cm下より検出された黒色土の上にあり，畑造成のため，第２層の上に客土されたものと考える。東側の旧地形は低くなっている。第２層は 漆黒色土で，古代～縄文後期の包含層である。第３層は黄褐色火山灰層で，縄文早期の包含層であるとともに，遺構検出面である。以上の土層は文化センター建設に伴う調査の土層と一致する。

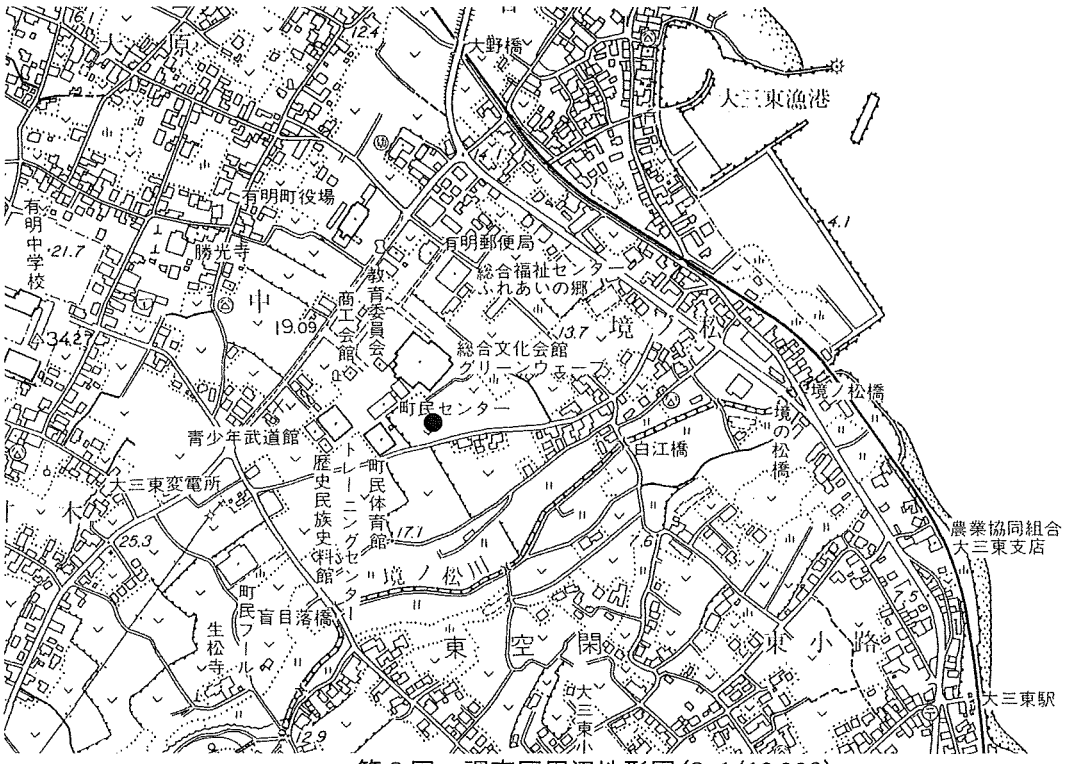
第２節　調査区の概要（第５図，第６図）

公共座標系を用いて，グリッドを設定し，グリッド法により調査を開始した。後半は遺跡範囲確定のために，調査区の周辺はトレンチを設定してトレンチ法で実施した。

最初に８ｍ×８ｍグリッド２箇所を調査した（Ｃ２，Ｆ４グリッド）。表土より除去していくが，黒灰色土が20cmほど堆積し，うっすらと縞状の耕作機による攪乱が判別できるのみであった。遺物は古代を中心とした土器の細片のみがわずかに出土する。

表土下25cm～30cmほどで漆黒色の土が部分的に縞状に残り，中より縄文後期三万田式の土器を出土した。これが本来の古代～縄文後期の包含層と判断した。しかしゴボウ耕作によるトレンチャーによる攪乱を頻繁にうけており，漆黒色の包含層は縞状に取り残されるように残存するのみである。表土より30～35cmほどで黄褐色土層に達した（第３層）。同層もトレンチャーの攪乱が顕著である。

本来，この土層に遺構が掘り込まれているのであるが，現状は攪乱されていた。縄文時代後期の太郎迫式の土器が原位置を動いた形で出土している。調査の結果，調査区全体で，トレンチャーの攪乱



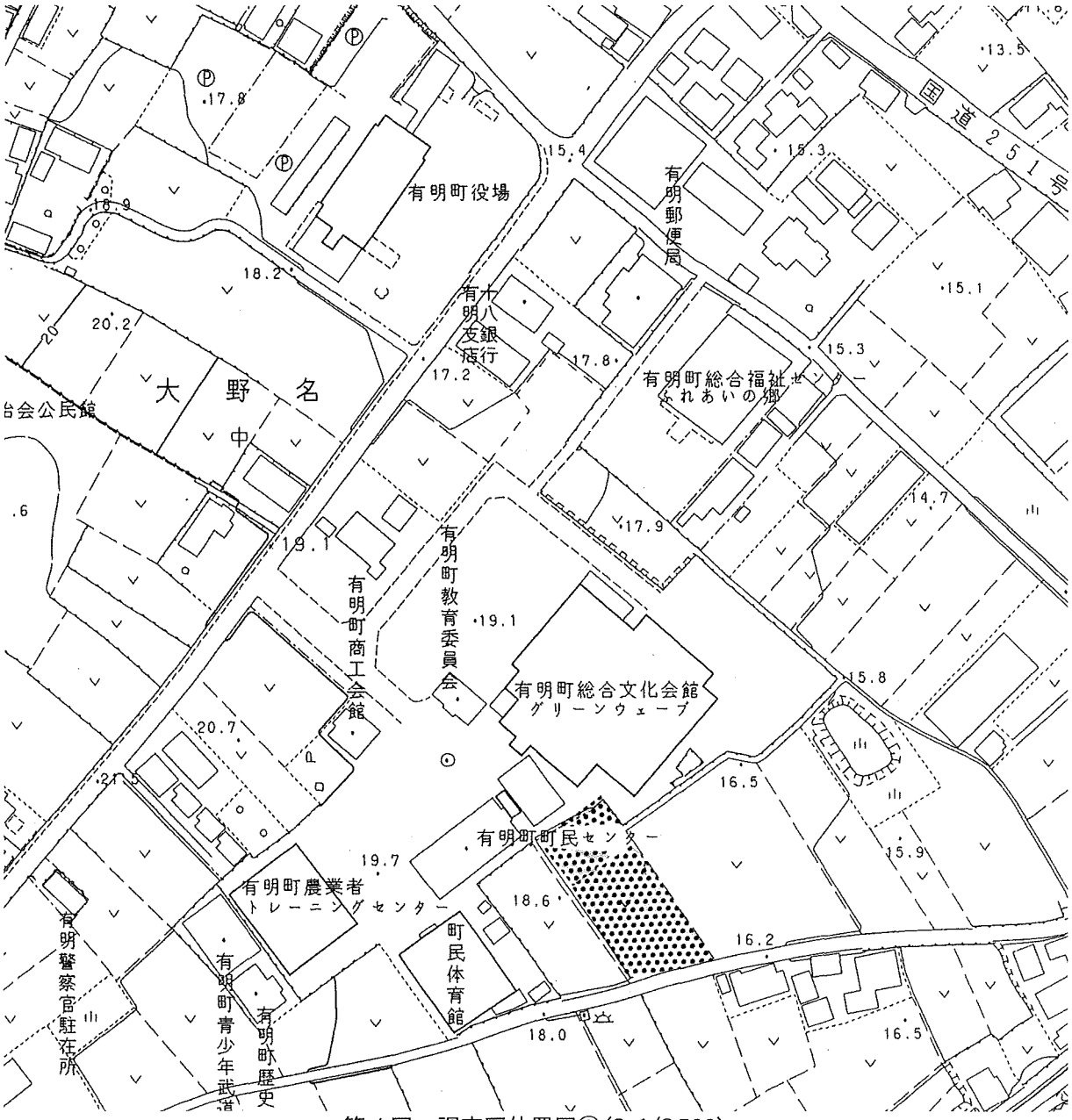
第３図　調査区周辺地形図(S=1/10,000)

が及んでいたことがわかった。したがって当該地域は奈良～縄文後期の包含層（漆黒色土）はトレンチャーによって攪乱され，大半を失っており，部分的に縞状に残土として残るのみである。

漆黒色土の下の黄褐色土は攪乱は及んでいるものの，遺構が残存しているかどうかは今後の調査の進展によらないと判然としない。

周辺部にいれたトレンチ調査により，漆黒色の包含層は調査区の東側では第１層が厚く，表土下60cm下で検出したが，トレンチャーで破壊されている。

東側の周辺トレンチの出土遺物は細片が多く，量も少ない。第３層（黄褐色火山灰層）まで掘り下げて遺構検出をおこなうが，不整形の落ち込みや，直径５cmほどの円形の小ピット（植物痕跡）などしか検出できない。調査地の東側はトレンチ調査の結果，黒色土が20～30cm残存していることがわかった。畑の高さ是正のため，厚く表土がのっている。



第４図　調査区位置図①(S=1/2,500)

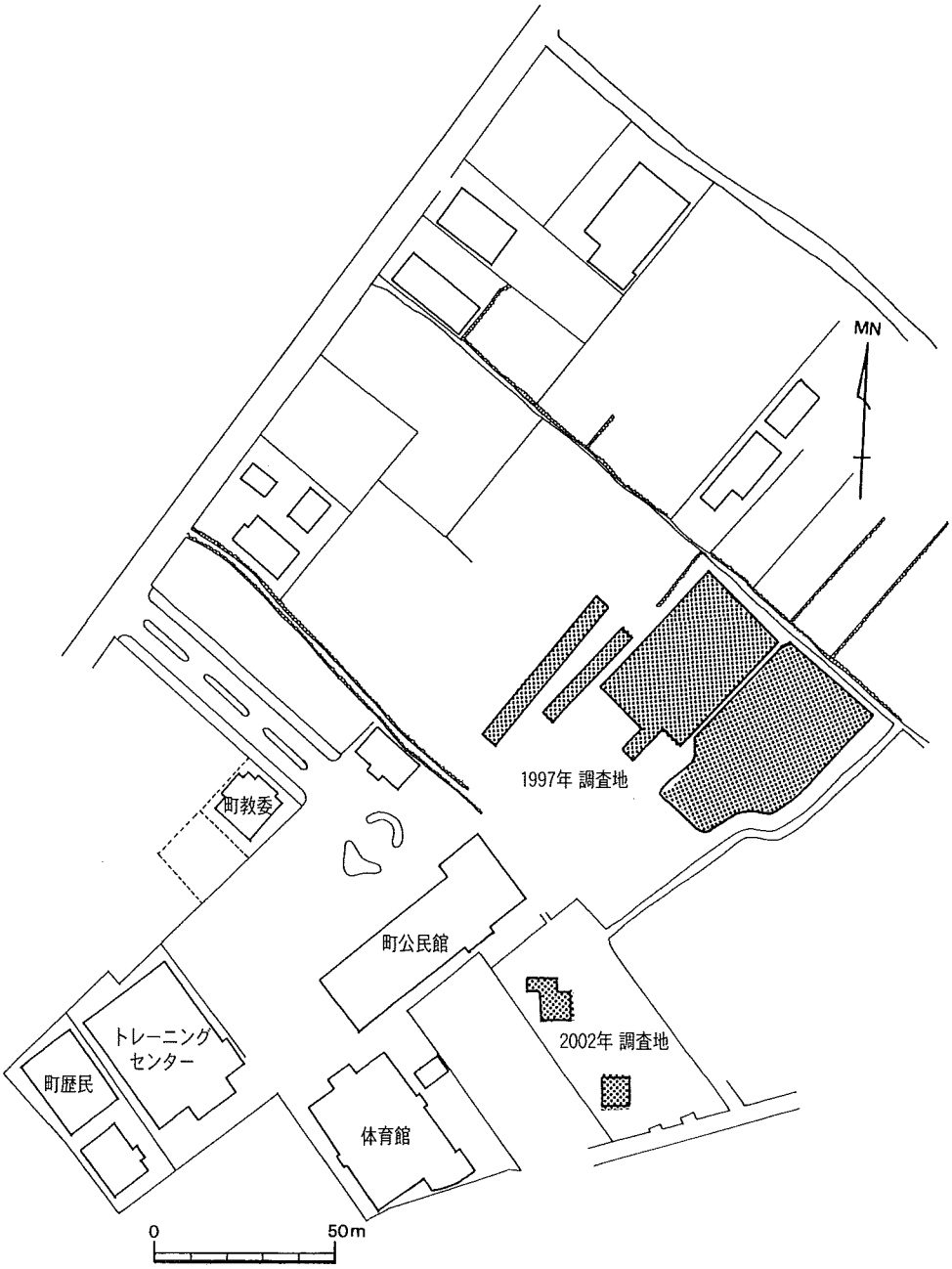
黒色土の上層は耕作によって攪乱されている。黒色土からの遺物出土は少なく，出土しても細片である。調査地の西側はほとんど黒色土が残っていないといえる。

第３節　遺構

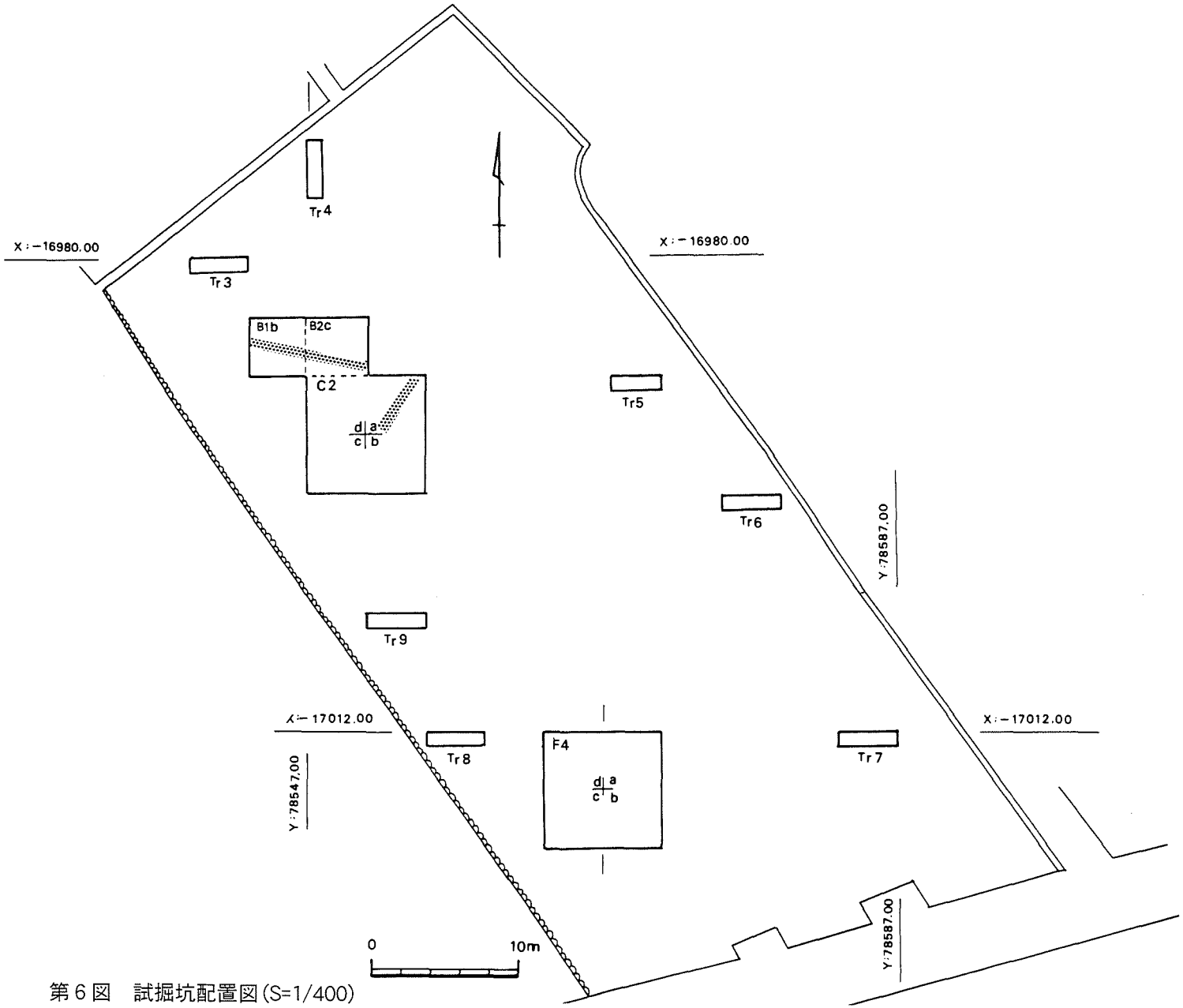
出土した遺構は溝状遺構（２条）とピットである。ピットは建物跡などのようなまとまりのあるものではない。

１　溝（第10，11図）

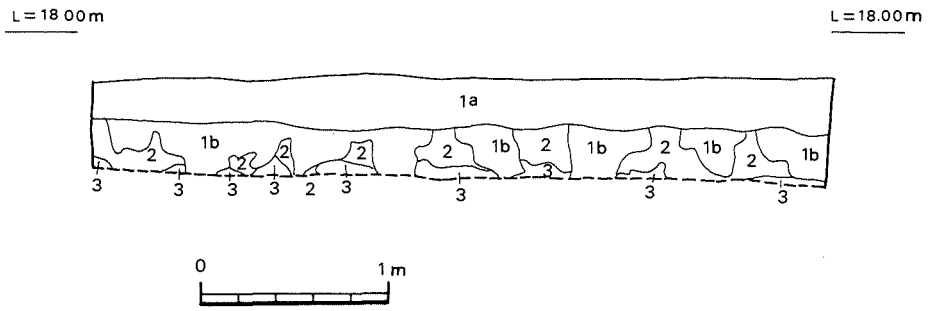
２本検出した。１本はＢ１ｂ，Ｂ２ｂグリッドで検出した。東西方向に走る。幅20cmで，深さは未掘のため不明である。１本はＣ２グリッドで検出した。幅30cmで，南西方向から北東方向に延びる。時期は縄文時代後期以降であるが，未掘のため限定した時期はわからない。



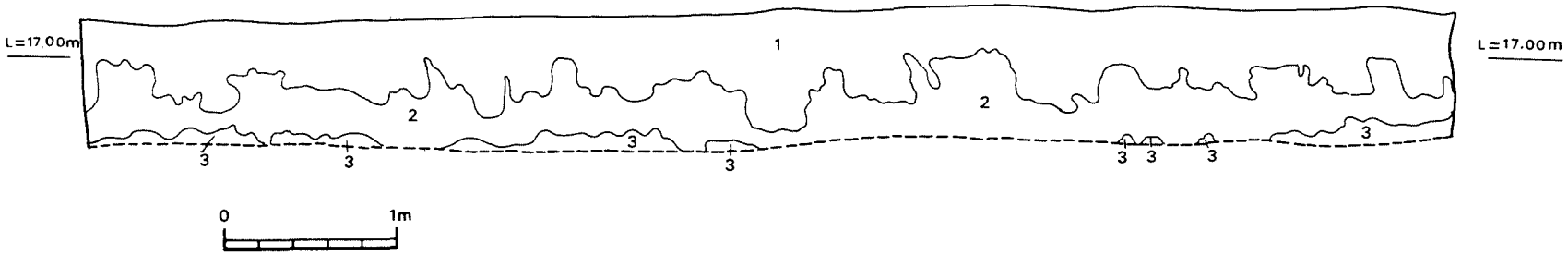
第５図　調査区位置図②(S=1/2,000)（諫見編2001に加筆）



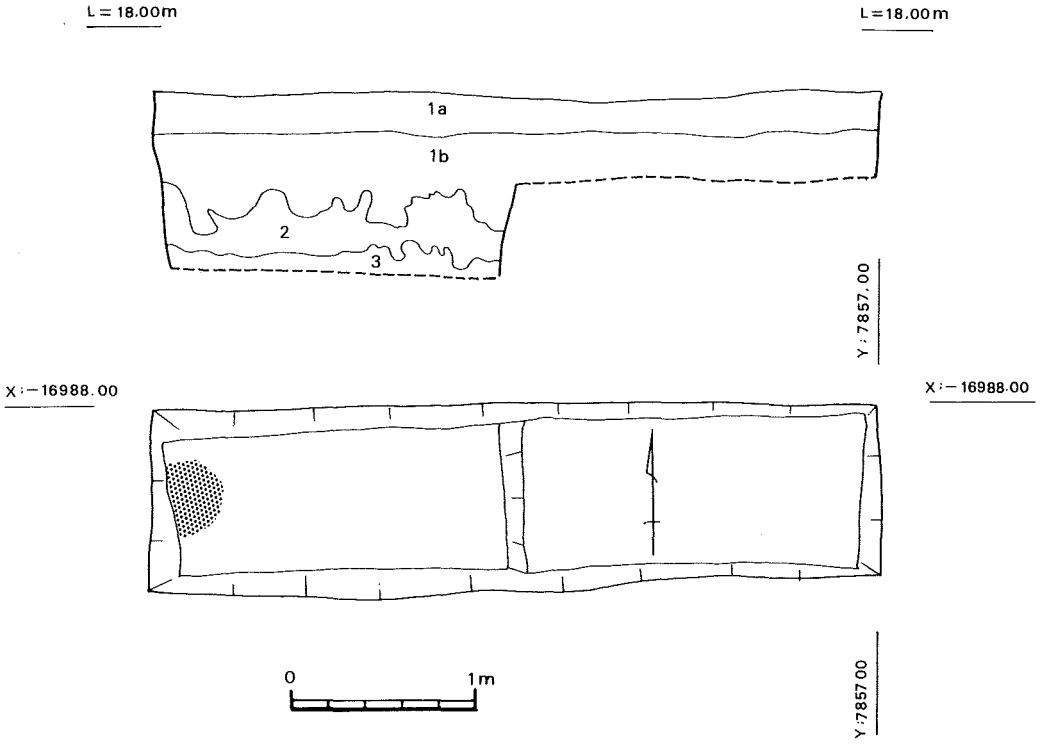
第6図　試掘坑配置図(S=1/400)



第７図　C2-D　北壁土層図(S=1/40)



第８図　F4-b　西壁土層図(S=1/40)



第９図　Tr５北壁土層図、平面図(S=1/40)

２　ピット（第10図，11図）

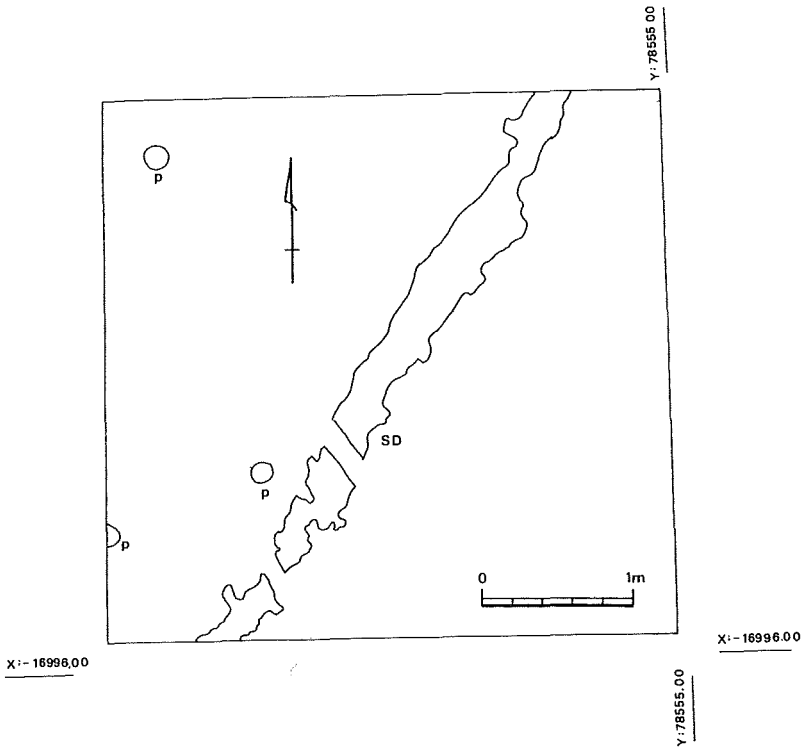
直径20cmほどの規模で，まとまりがあるものではない。時期も縄文後期以降とまでしかいえない。

３　調査区の概要

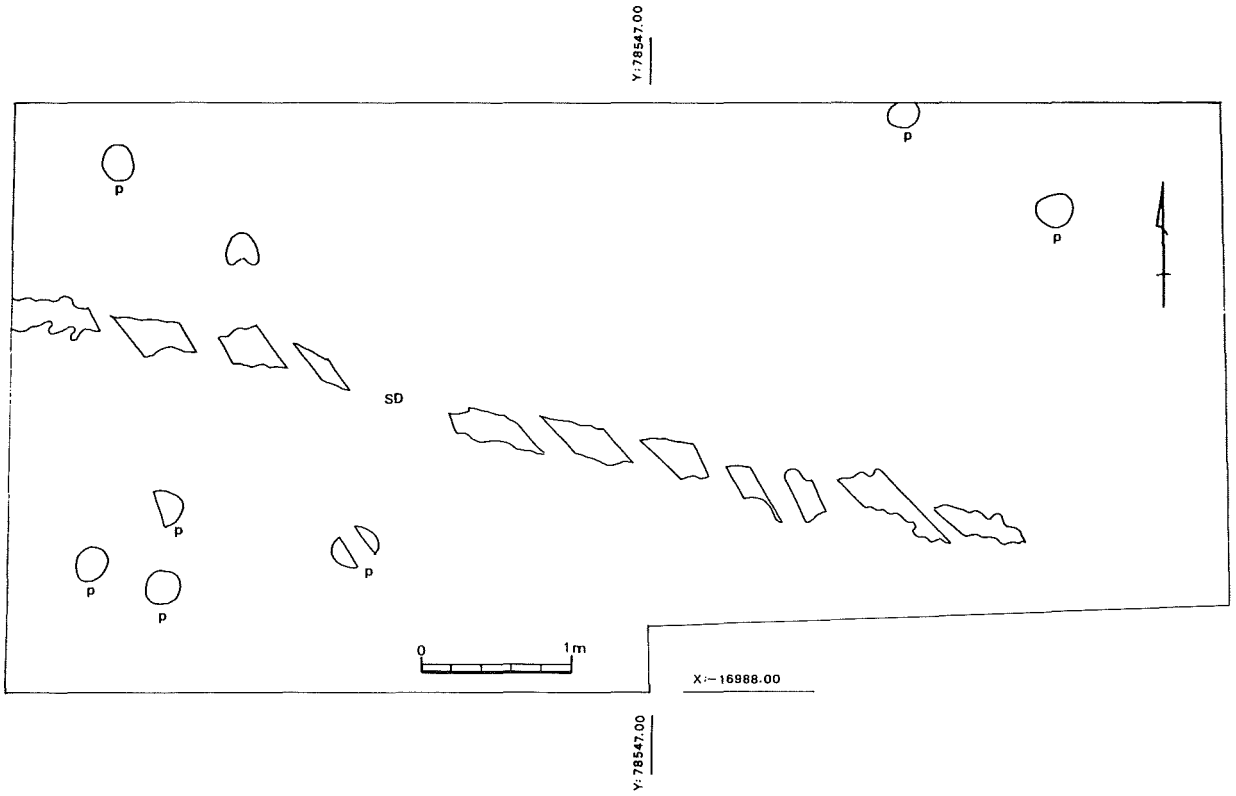
各グリッドやトレンチの状況からみて，調査区の状況は下記のようなものである。文化会館建設時の調査区に比べて，文化層の残りは良好ではない。Ｔｒ３，４，８，９およびＢ１ｂ，Ｂ２ｃ，Ｃ２，Ｆ４グリッドをのせる区域は古代から縄文晩期の包含層である第２層が，ごぼう栽培に使われるトレンチャーの撹乱により，残存状況が悪い。出土遺物も細片が多く，出土量も少ない。第３層にもトレンチャーの撹乱は及んでいるが，影響は少ない。遺構は第３層上面で検出可能である。第３層中に遺物を含むのか，第３層下がどのような状況下は未発掘のため不明である。

一方，Ｔｒ５，Ｔｒ６，Ｔｒ７の状況より，調査区の東側は傾斜を是正するための客土が第２層の上にあり，第２層の層厚は20～30cmほど残存する。しかし，遺物の出土状況は先述の調査区西側と大差はないようである。

したがって，もしも今回の調査地に開発が入った場合は西半分は黄褐色土（第３層）上面まで重機で除去し，第３層に堀込まれた遺構を確認する必要がある。東側の半分は（旧地形でいうと斜面側）では表土から黒色土上面までは50cmほどＩｂ層の層厚があり，そこまでは重機で除去可能である。Ｉｂ層の黒色土が20cm～30cm程度残っているので，黒色土上面まで重機で剥ぎ，第２層を調査しその下の第３層上面で検出される遺構を調査する必要がある。第３層以下の調査は再度試掘をする必要があるであろう。



第10図　C2-bグリッド検出遺構平面図(未掘)(S=1/50)



第11図　B1-b、B2-Cグリッド検出遺構平面図(未掘)(S=1/50)

第Ⅲ章　出土遺物

第１節　土器

１　縄文後期後葉の土器（１～17）

２～12は縄文後期後葉の太郎追式土器の浅鉢形土器である。口縁部が「く」字状に屈曲するのが特徴である。文化会館建設の際の調査では良好な資料が出土している。14は三万田式土器，15は鳥井原式土器である。

２，３は口縁部文様帯に３本の沈線を施すものである。両者ともに内外面黄褐色で胎土には角閃石を含み，精良である。研磨も丁寧で精製土器である。２のみは口縁部文様帯に斜行沈線を施した後に横走する沈線を施している。

５は浅鉢形土器の肩部文様帯の部位である。上位に縄文を施し，対向する沈線は「Ｘ」字状をなす。中段にも縄文を充填させたあとにナデ消している。外面は黒褐色，内面は褐色で，胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

４，６，７はいずれも波状口縁部の頂部である。口縁部文様帯の沈線は２本である。４は外面暗褐色，内面は褐色で，胎土に角閃石を含む。焼成は良い。６，７は内外面明黄褐色で，胎土に角閃石を含む。焼成はややあまい。

８は口縁部の頂部以外の部位である。文様帯の沈線は２本である。金雲母および角閃石，砂粒を多く含む。よく研磨されており，焼成も良好である。

９，10，11，12は浅鉢形土器の口縁部である。口縁部文様帯は無文である。10，11は内外面が明黄褐色，胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。９は内外面黄橙色で胎土に砂粒を含む。焼成は堅緻である。12は外面黄褐色，内面は黒褐色である。胎土に角閃石を多く含む。焼成は良好である。

14は三万田式土器の深鉢形土器の口縁部である。口縁部文様帯は沈線３本である。外面は明黄褐色，内面は暗褐色である。胎土には若干の砂粒を含むが，精選されており，研磨も丁寧で，精製土器である。15は鳥井原式土器の浅鉢形土器である。口縁部文様帯の凹線は３本である。内外面暗褐色で，胎土には角閃石を多く含む。焼成は良好である。

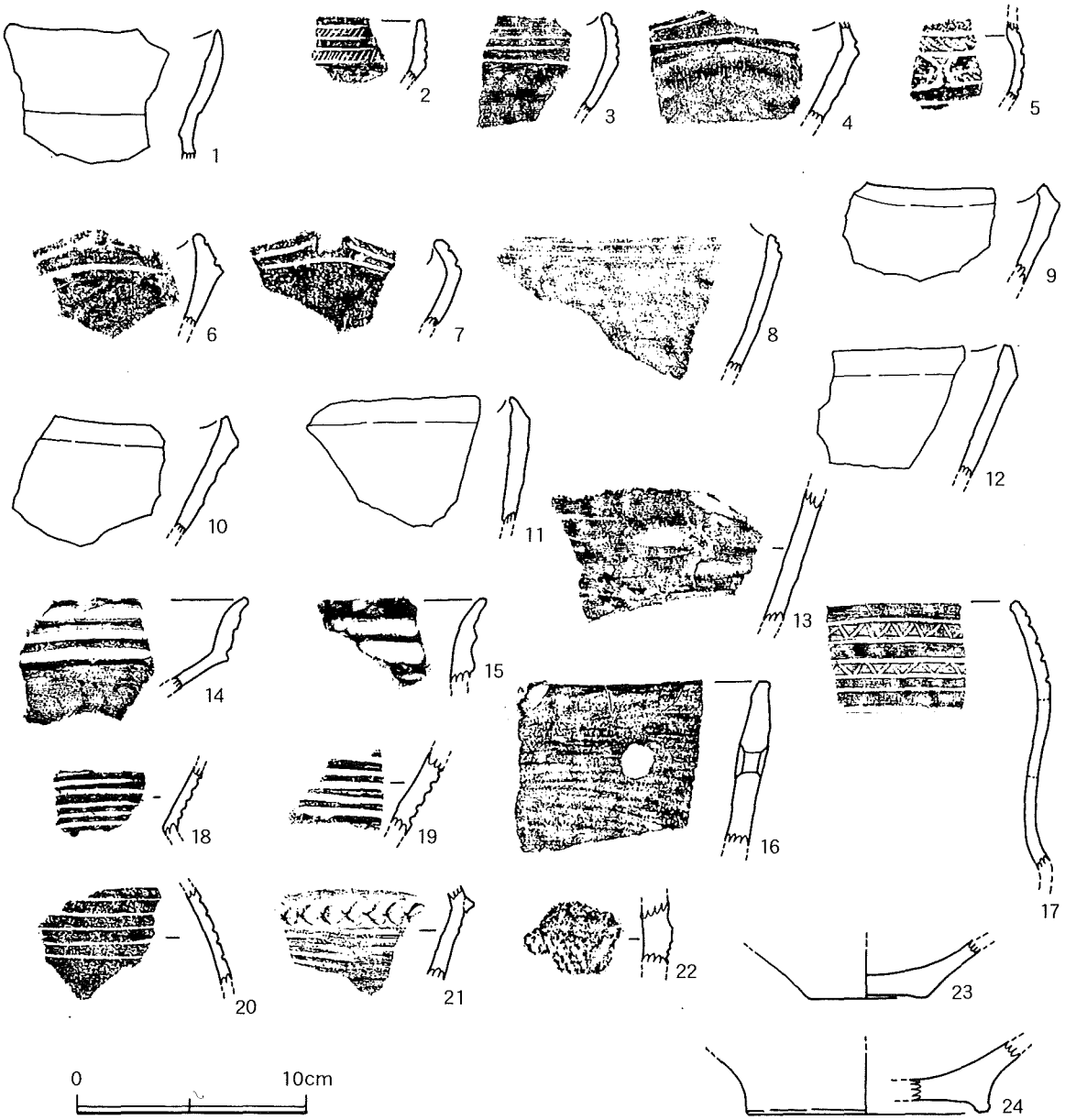
13，16は粗製土器の口縁部および体部である。13は内外面褐色で，外面は条痕調整で，内面はナデ調整である。器面や断面には細かい孔が多数あいており，いわゆる「鬆（す）」が生じている。胎土中の植物繊維などの混和剤が焼失したものかもしれない。焼成はややあまい。

16は内外面暗褐色で，外面は条痕調整のナデ消し，内面は丁寧なナデ調整である。補修孔があるところが特徴である。胎土は火山起源の砂礫を多く含み，焼成は良好である。

前述の太郎追式，三万田式，鳥井原式土器とは異なる資料が１と17である。いずれも口縁部が内弯するところが大きく異なる。北久根山第二型式と西平式，太郎追式の間に位置する土器型式である。

１は無文の磨研土器で，口縁部は波状をなす。内外面褐色で，胎土には長石，角閃石などを含む。焼成は堅緻で，磨研も丁寧な精製品である。

17は緩やかな逆「Ｓ」字状の体部をもつ。口縁部文様帯は６本の横走する沈線を施し，中に「ハ」字状の文様帯を２段設けている。施文順序は「ハ」字状の連続文ののちに，横走する沈線である。内外面は褐色で，胎土に若干の金雲母を含む。外面は丁寧に研磨されており，焼成も良好である。



第12図　出土土器実測図(S=1/3)

2　縄文晩期前葉の土器（18～20）

いずれもタガ状口縁部に文様帯をもち，横走する沈線を数条施すものである。熊本県では古閑式と呼ばれる型式であり，島原半島では島原市畑中遺跡で良好な資料が出土している。

18は内外面黒褐色で，胎土に角閃石や砂粒を含む。焼成は良好である。19は内外面赤褐色で，胎土には金雲母，砂粒を含む。焼成は良好である。20は外面黒褐色で，内面は明黄褐色である。金雲母を含み，多くの砂粒を含む。焼成はややあまい。

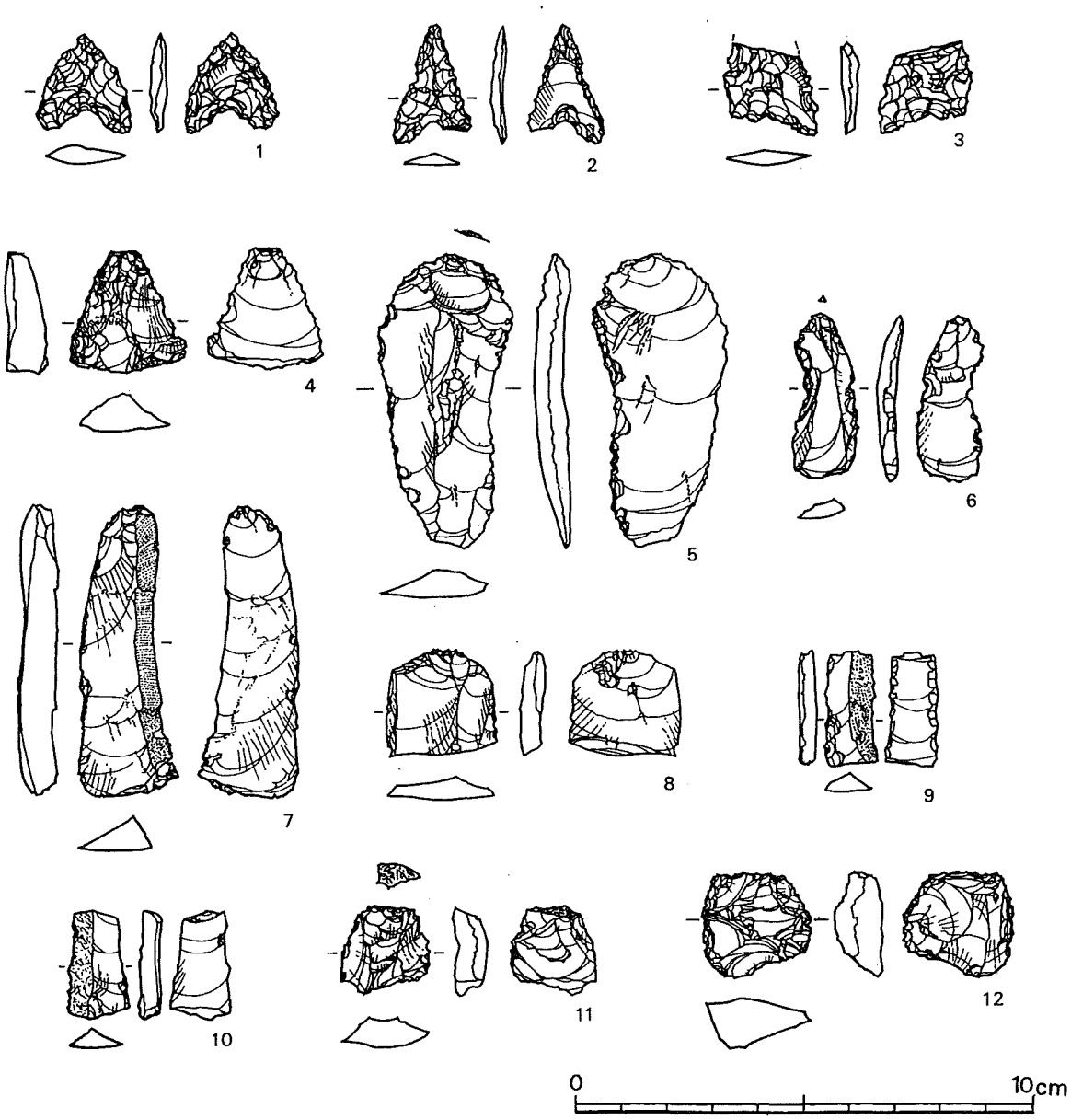
3　縄文晩期後葉の土器（21）

21は刻目突帯文の土器である。外面は条痕調整，内面は荒いナデ調整である。内外面暗褐色で，胎土に角閃石，白雲母を含む。焼成は良好である。

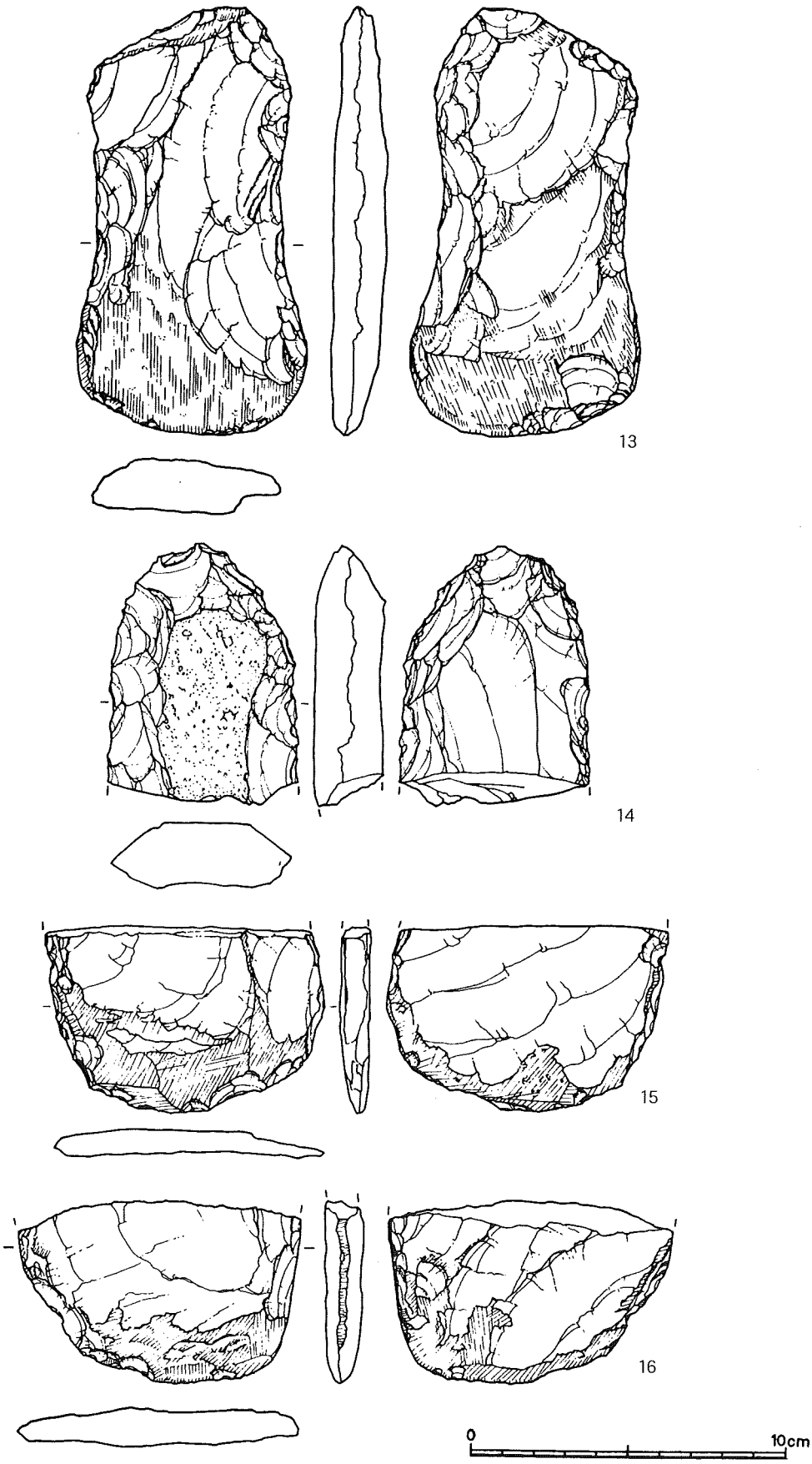
22は組織痕文土器である。内外面は赤褐色で，胎土には角閃石などを含む。焼成はあまい。粗製土器である。

第２節　石器

１～３は石鏃である。４は石鏃未製品。５，６は縦長剥片で，７～10は鈴桶技法により剥離された縦長剥片である。11は剥片，12は小形の石核である。



第13図　出土石器実測図①(S=2/3)



第14図　出土石器実測図②(S=2/3)

図　　版

図版1

大野原遺跡近景

遺構検出状況

調査風景 2

第Ⅲ部　畑中遺跡（島原市）

例　　言

1．本書は島原市中原，亀の甲，御手水町に所在する畑中遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は長崎県教育庁学芸文化課が事業主体となり，有明町教育委員会の協力を得て，平成１４年１２月９日から同年１２月１３日にかけて実施した。
3．調査関係者は次のとおりである。

調査担当	長崎県教育庁学芸文化課	主任文化財保護主事	古門雅高
		文化財調査員	本多和典
		文化財調査員	樋口健太郎
調査協力	島原市教育委員会	主事	土橋啓介

4．遺構の実測は調査担当者がおこなった。
5．遺物の実測は石器は中村ヒロ子，土器は古門がおこなった。トレースは和田美加，浜崎美加，横田愛子，成田万里，拓本は冨永諭美の協力を得た。
6．本書における遺物・写真・図面は長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。
7　本書の執筆・編集は古門がおこなった。

本　文　目　次

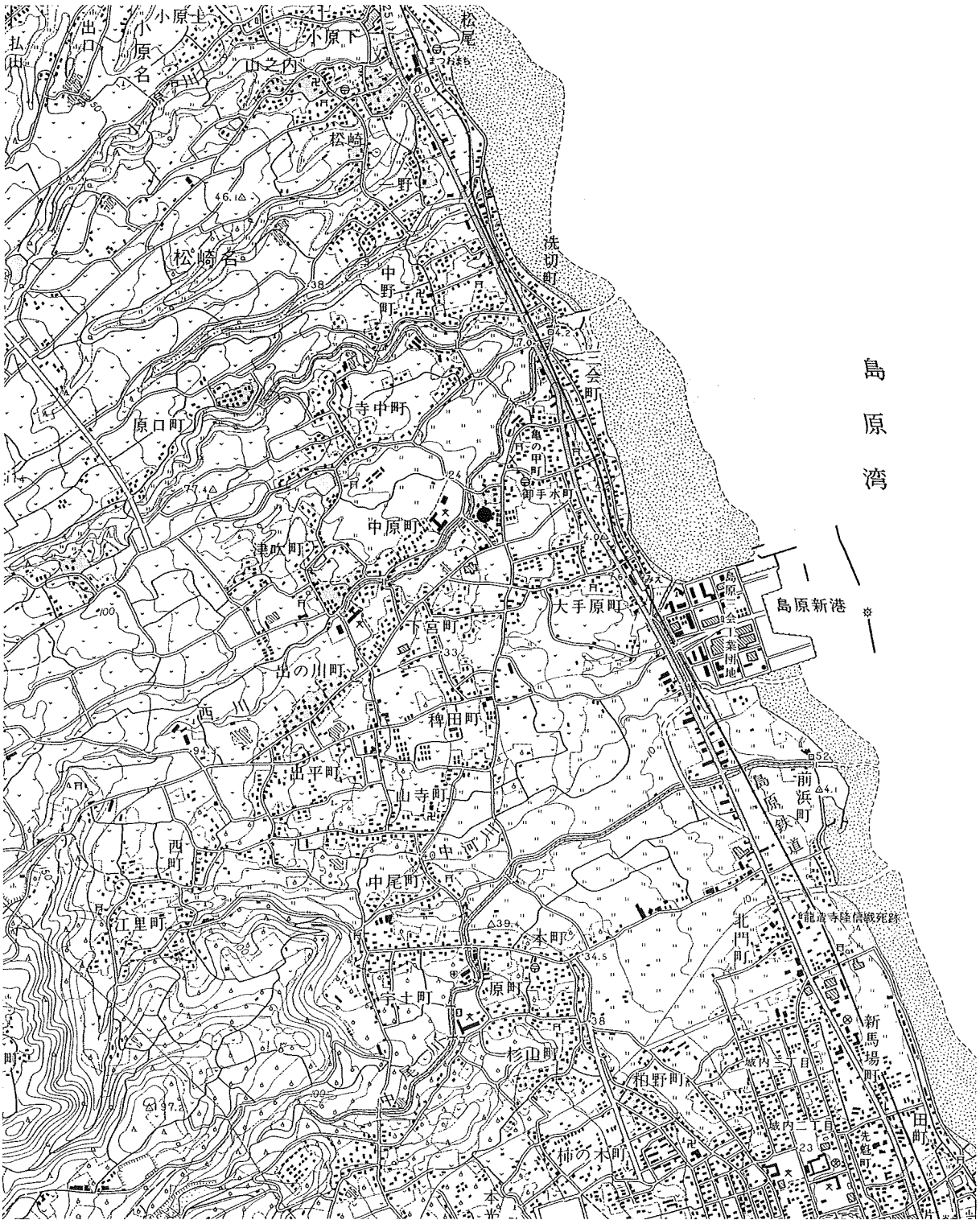
第Ⅰ章　遺跡の環境と調査履歴……58
第Ⅱ章　調査……60
第Ⅲ章　遺物……61
第Ⅳ章　畑中遺跡の遺構について……62
第Ⅴ章　畑中遺跡出土の土器について……63
第Ⅵ章　まとめ……63

図　版　目　次

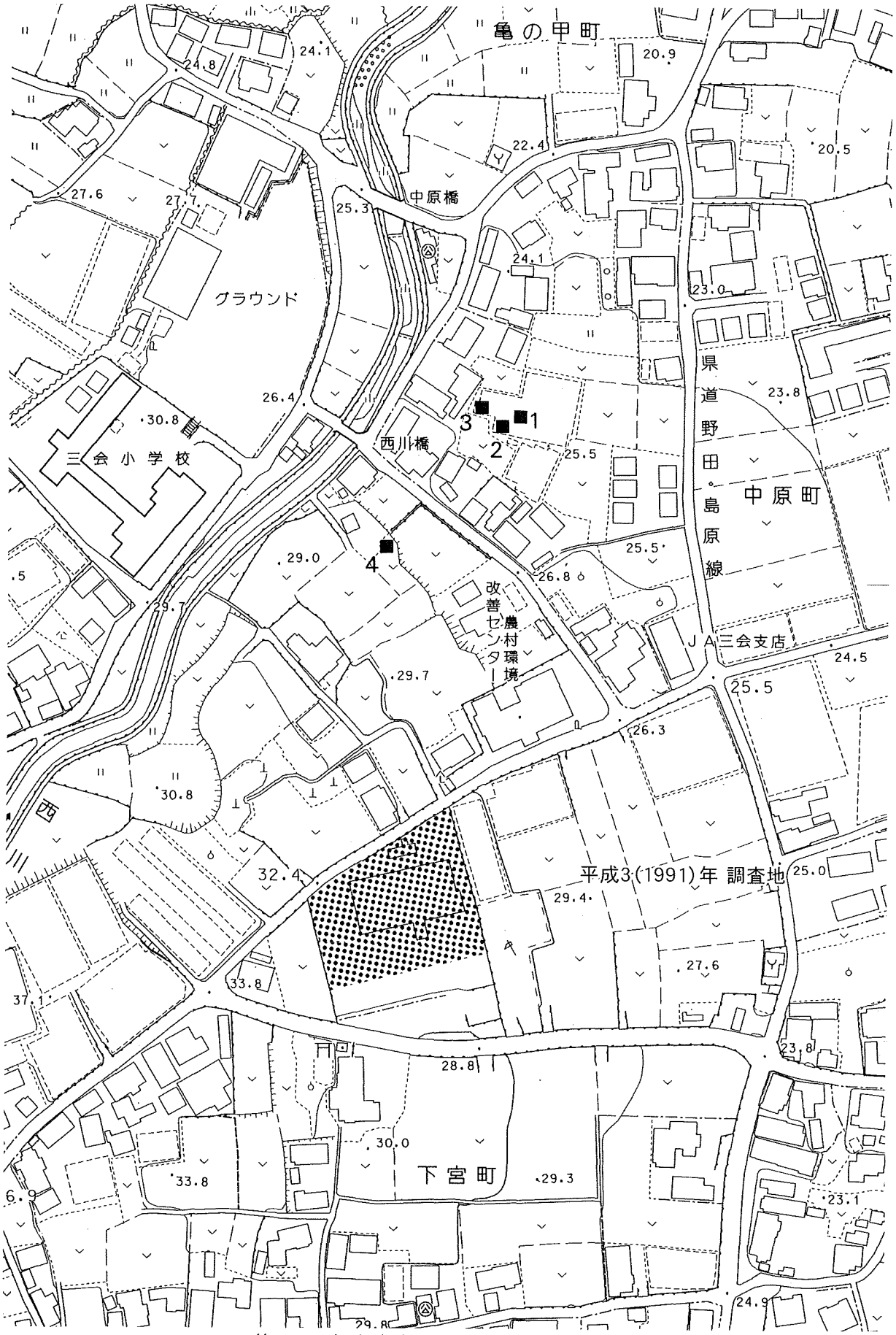
第１図　畑中遺跡位置図(S=1/25,000)……58
第２図　畑中遺跡調査区位置図(S=1/2,500)……59
第３図　畑中遺跡調査区配置図(S=1/400)……60
第４図　第１試掘坑土層図, 平面図(S=1/30)……61
第５図　第３試掘坑, 第２試掘坑土層図(S=1/30)……62

第Ⅰ章　遺跡の環境と調査履歴

畑中遺跡は島原市の北東部に位置し，かつては三会村に属した。遺跡に隣接して西川が流れるが，渡河して北西へ300mほど行くと有明町に至る。遺跡付近は普賢岳山麓に形成された火山性扇状地の先端部にあたり，標高は約30mほどである。この扇状地の扇央部から扇端部には多くの遺跡が存在し，三会地区は本県でも遺跡密度がきわめて高い地域である。扇頂部には礫石原遺跡が存在する。



第1図　畑中遺跡位置図(S=1/25,000)



第２図　畑中遺跡調査区位置図(S=1/2,500)

第Ⅱ章　調査

畑中遺跡は1994年（平成３）に紡績工場の建設工事に伴い，県教委が緊急調査を実施した。調査の結果，縄文早期，晩期，中世の文化層を確認している（安楽・村川1994）。

遺跡範囲外の西側に試掘坑を４箇所設定した。基本土層は下記のとおりであるが，第４試掘坑だけは２ｍほど掘り下げた。

第１層　表土（耕作土）

第２層　明黒褐色土

第３層　黒褐色土

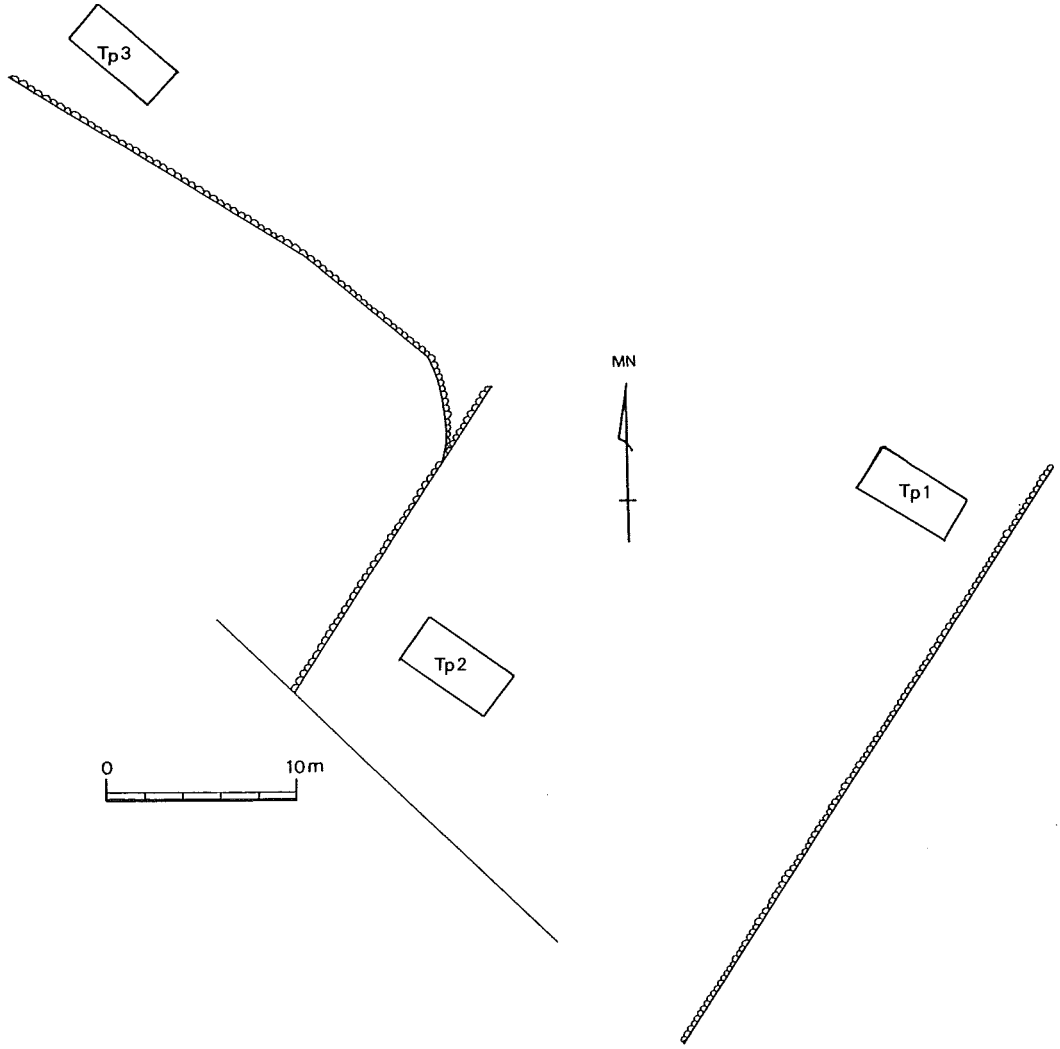
第４層　カシノミ層

第５層　火砕流

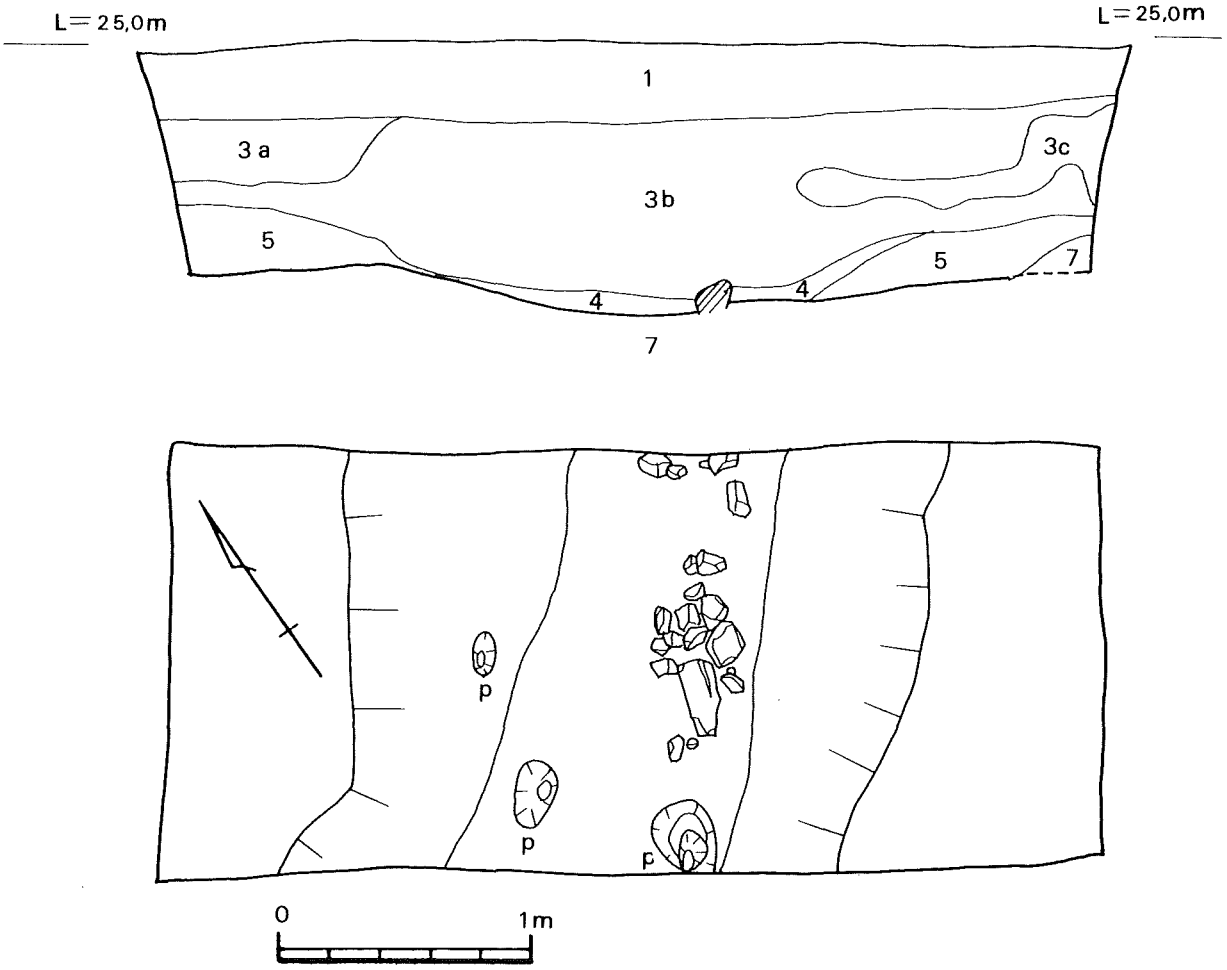
第６層　黒褐色土層

（１）第１試掘坑

第２層より砥石を出土した土坑などの遺構が出土したが，時期は古代以降と考えられるものの，明確な時期は特定できなかった。同層からは縄文，弥生，古代の遺物が細片となって出土しており，ま



第３図　畑中遺跡調査区配置図(S=1/400)



第４図　第１試掘坑土層図、平面図(S=1/30)

とまった包含層とは考えられない。

第5層を切り込んで溝を検出した。幅2.3m，深さ0.3mが残存する。遺構の時期は不明である。

（2）第２試掘坑

みかん栽培によるとみられる攪乱がみられ，土層が安定しない。

（3）第３試掘坑

近世末から近代の陶磁器片が出土したのみである。

（4）第４試掘坑

表土（耕作土）下はカシノミ層である。カシノミ層下は黄褐色砂礫層である。同層上部は20～30cm大の角礫を含むが，下層は礫のみとなる。この礫層をさらに下げたところ黒褐色土が層厚50cmほどの堆積が見られた。

第Ⅲ章　遺物

出土遺物の中に報告すべき資料は見られなかった。

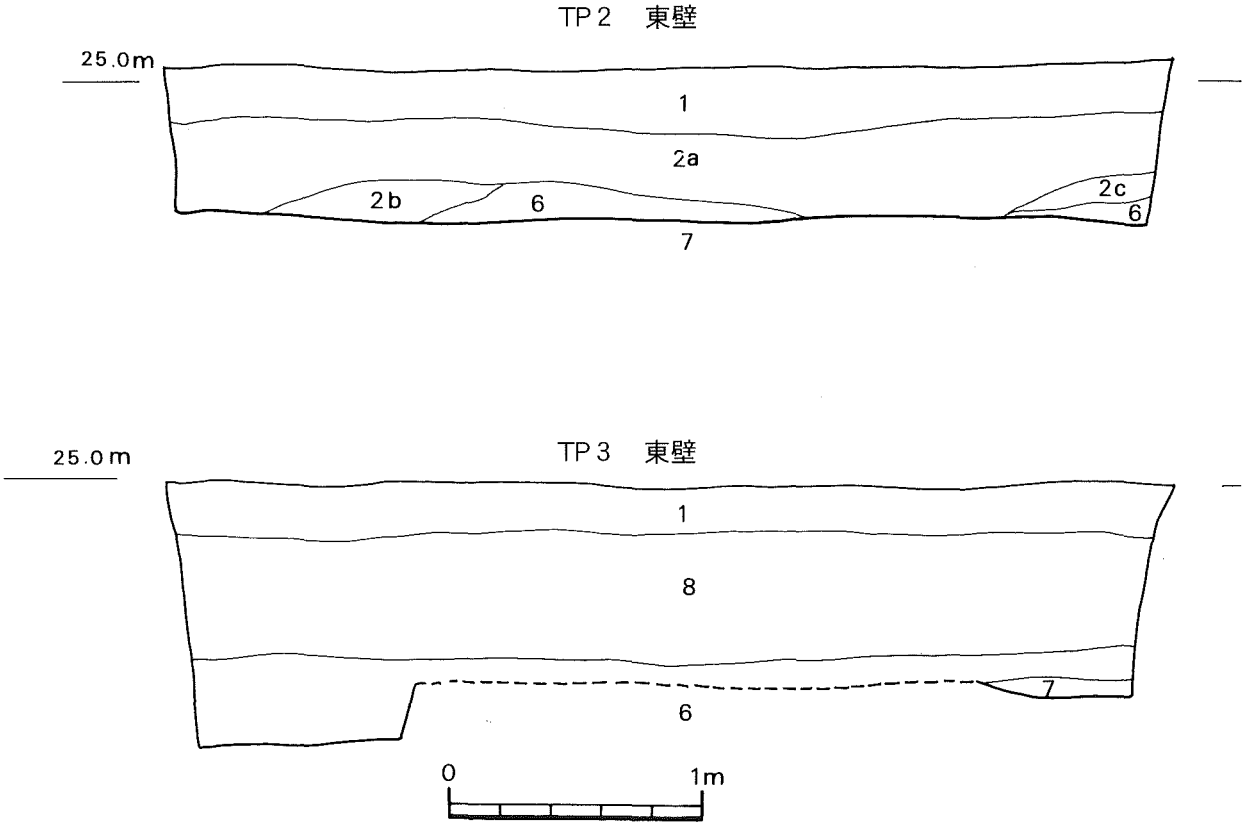
第Ⅳ章　畑中遺跡の遺構について

1．溝状遺構

1991年（平成３）の調査では，紡績工場の建設に伴い，駐車場部分と工場の基礎部分のみの調査が実施された。ここでは，駐車場部分より出土した東西方向に走る溝（ここではＳＤ１とする）について検討する。報告者は北側にも溝状の落ち込みがあり，「二方を溝で囲み」としているが，北側の落ち込みは隣接する「道路を開削した時の削りあととも考えられる」とも記し，別の頁では「道路建設の時の堀り方の痕跡であろう」と記している。北側の落ち込みはＳＤ１を切っているので，ＳＤ１，後述するＳＤ２とは関係がない遺構といえる。

さらに東西方向に溝状遺構があり（ＳＤ２とする），報告者は「道路状遺構」としているが，その根拠は明記されていない。明確な根拠を示せない以上，溝状遺構とすべきであろう。

ＳＤ１とＳＤ２では深さや溝の形状が異なる。報告者もＳＤ２は「道路状遺構」として両者の違いを認識している。しかし，連結していないが，直交する点からみて併存していれば区画溝と考えられよう。しかし，報告者は別頁では方形に区画された「方形区画」としている。ＳＤ１とＳＤ２が同時代という根拠はなく，「方形区画」という表現は適切ではない。さらに「まとめ」の頁では「方形区画の溝で区画された屋敷地」という記述があり，さらなる飛躍が見られる。現状では併存したことを前提とした「区画溝」という以上のことは言えない。



第５図　第３試掘坑、第２試掘坑土層図(S=1/30)

2．竪穴状遺構と掘立柱建物跡

ＳＤ１，ＳＤ２付近で検出している竪穴状遺構付近で報告者は掘立柱建物跡２棟を復元している。竪穴状遺構は掘立柱建物跡に切られ，竪穴状遺構→掘立柱建物跡という時間的変遷になる。報告者は「住居跡（？）」としているが，遺構の性格については触れられていない。プランが不整形であることや集石をもつ点，直径が10mと大きいことなど，特異な遺構である。単なる住居ではなく，後述する鍛冶遺構を考慮すると作業場などの機能も考えられる。

3．鍛冶遺構

紡績工場の建物基礎部分の調査で検出されている製鉄遺構について検討する。報告されているのはＦ11区１基であるが，図版８には「Ｊ９製鉄遺構」の見出しがある写真が掲載されている。さらに鉄滓を分析された大澤正己氏の論攷には「鍛冶炉３基」とされている。正確な基数が不明な点は報告書として問題である。大澤氏によると分析した鉄滓３点はいずれも「鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓で，精錬鍛冶工程の初期段階から後工程へと順を追って漸次移行した」ものという。大澤氏は当遺跡が「鍛冶原料の荒鉄の成分調整を目的とした精錬鍛冶（大鍛冶）が行われた鍛冶工房跡である」と結論づけられている。さらに遺跡近くに「製錬を行った製鉄炉が存在した可能性」をも示唆されている。

4．畑中遺跡の性格

畑中遺跡の性格を考える上で，最も重要な遺構は鍛冶遺構であろう。大澤氏が指摘するように畑中遺跡が「鍛冶工房跡」であれば，出土した数棟の掘立柱建物跡や竪穴状遺構さらには区画溝なども鍛冶工房と無関係とするよりも，関連した施設としたほうが，可能性が高いと言えよう。

第Ｖ章　畑中遺跡出土の土器について

1991年（平成３）の調査で，畑中遺跡からは縄文早期の貝殻条痕系の土器と縄文晩期前葉の土器群が出土している。いずれも他の型式を含まず出土しているところからみて，単一の文化層からの出土とみられる。貝殻条痕文系の土器については水ノ江和同氏により，有明町一野遺跡出土資料を標式として，一野式として設定されている。

一方，晩期前葉の土器については，十分な検討が行われていない。一群の土器はタガ状口縁に複数の沈線を施すものであり，熊本県では「古閑式」と呼ばれる型式で，水ノ江が「百花台段階」と呼ぶ土器群でもある（水ノ江1997）。1994年の報告書では「古閑式」という型式名は使用されていない。今後は古閑式との比較検討をおこない，独自型式設定の可能性も検討すべきであろう。

第Ⅵ章　まとめ

今回は遺跡範囲の確認調査ながら，冬野菜の栽培の最盛期のため，調査地の確保がままならず，調査期間も５日間という短期であったため，遺跡範囲の確定までにはいたっていない。現状では，西川の東岸までは遺跡が広がらない可能性が強い。４箇所の調査坑を設定したが，いずれも包含層を確認することはできなかった。しかし第４試掘坑ではカシノミ層下の火砕流を掘りきったところ下に黒色土が堆積していることが判明した。従来，火砕流で調査を終了させていたが，今後の検討課題である。

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちいききょてんいせきないようかくにんちょうさほうこくしょ
書　　名	地域拠点遺跡内容確認調査報告書
副 書 名	
巻　　次	1
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 176 集
編著者名	川道　寛・古門雅高
編集機関	長崎県教育委員会
所 在 地	〒 850-0861　長崎県長崎市江戸町 2-13　TEL　095-826-5010
発行年月日	2004 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
百花台 遺跡群	南高来郡 国見町 多以良	362	13	32° 49′ 32″	130° 17′ 36″	2003/01/20- 2003/02/04	88 ㎡	学術調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百花台 遺跡群	包蔵地	旧石器	なし	細石刃 細石核 打面再生剥片	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
大野原遺跡	南高来郡 有明町	361	11	32° 50′ 42″	130° 20′ 19″	2003/01/20- 2003/01/30	188 ㎡	学術調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大野原遺跡	包蔵地	縄文・弥生	柱穴，土坑 溝	縄文後期土器 石鏃，剥片 打製石斧	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
畑中遺跡	島原市 亀の甲町 御手水町	203	17	32° 49′ 6″	130° 21′ 17″	2002/12/09- 2002/12/13	28 ㎡	学術調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑中遺跡	包蔵地	縄文・弥生	溝，ピット		

長崎県文化財調査報告書　第176集

地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅰ

平成16年３月31日

発　　行　長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印　　刷　平和堂オフセット印刷㈲

長崎市出島町5番11号